國立政治大學日本語文學系
碩士論文

指導教授：吉田妙子

非難のニュアンスを持つ「ダロウ＋助詞」の意味用法

國立政治大學 National Chengchi University

研究生：黃志傑　撰

中華民國九十九年一月

謝　辭

經過了三年半的掙扎與努力，終於完成了碩士學位。從一開始研究組別的認定、尋找論文題目、到完成論文，這段碩士之路走得可算是十分艱辛。中途有多次想放棄，但多虧各位老師、朋友的鼓勵、指導下，才順利取完成學業。

論文審查方面要感謝擔任口試委員的蘇文郎老師及王世和老師。承蒙老師們的指正建議，使論文更加完備，讓我受益良多。

當然最要感謝得是指導教授　吉田妙子老師。老師從研究方向開始，便給予莫大的協助，並多次舉辦讀書會，讓同學們相互交流，以及每週的論文指導。論文得以順利完成，全靠老師的細心指導與鞭策。另外，論文指導多半是利用中午時間，也因此常有機會嚐到老師親手製作的愛心便當。課業以外的部份，多次受到于乃明老師及徐翔生老師的關照，時常給予鼓勵，藉此深表感謝。

由於生活費、學費等需要靠自己賺取，除了課業外，打工也是我研究所生活中不可少的一部分。因此要感謝日文系賴庭筠助教，多次提供就業機會，讓缺錢的研究生得以溫飽。還有歷史所李素瓊助教，讓我有機會在所上貢獻所學。當然不能少了上課的同學：小內、清雲、鼎青、致榮、睿恂、志驅、義淞、曉雯、硯棻、如慧等，不僅當金主提供了將近兩年的資助，也透過教學中，使我找到了論文題目，這一切都感謝你們大家的支持。另外多次受到林怡君學姐的照顧，介紹不少工作機會，讓我在經濟方面不虞匱乏。

接著要感謝我的同學：秉杰、鈞傑、凱博、昭英、薏婷、婷莉、玉萱，謝謝大家的陪伴，度過這段痛苦但又甜蜜的日子。還有橫山麻紀學姐的多方照顧，分享經驗，並提供各種資訊給學弟妹們。最後要感謝我的家人，雖然他們都不在台北陪伴，但仍舊能感到他們的支持與包容，像是一年回家不到五次等等。

謹此感謝幫助過我的老師、同學、朋友，並感謝閱讀此論文的每位，希望內容能有所幫助。

國立政治大學 National Chengchi University

表示責難的「darou＋助詞」之意思用法

摘要

本文是以情態形式「daro」與終助詞「yo」、「ne」、「ga」「ni」及接續助詞「ga」相互結合時所產生的意思變化為考察對象。其探討重點首先將分析終助詞「yo」、「ne」、「ga」「ni」的基本義及其使用方法。接著針對「daro_ne」、「daro_yo」、「daro_ga」、「daro_ni」等形式之結合為何會產生責難、不信任之意加以探討。並將這四者對照比較，藉此探究各形式之間的差異。最後也針對「daro」與接續助詞「ga」結合後所產生的並列用法加以探討，並與「～demo～demo」對照比較，探討其用法之差異。

考察之結果，可得知其衍生意思是由於終助詞與表示不同意思的「daro」相互結合而產生的。終助詞「yo」與表示「推測」的「daro」相互結合會產生出詰問之意。另一方面，終助詞「ga」與表示「要求確認」的「daro」之組合會產生出責難等意思。

關鍵字：「daro」、終助詞「ne」・「yo」・「ga」・「ni」、接續助詞「ga」、責難、不信任感

國立政治大學 National Chengchi University

非難のニュアンスを持つ「ダロウ＋助詞」の意味用法

要旨

本稿では、蓋然性モダリティダロウに終助詞ネ、ヨ、ガ、ニ、及び接続助詞ガがつく際に起きる意味変化を中心に考察する。手順としては、まず、終助詞ネ、ヨ、ガ、ニの意味及び用法を整理する。次に、それぞれダロウネ、ダロウヨ、ダロウガ、ダロウニには、なぜ非難、不信感、皮肉などのニュアンスが生じてくるかについて検討する。そして、考察した四者を比較して、その働きのプロセスからその差異を把握する。最後に、ダロウと接続助詞ガとの共起について考察し、さらに並列表現「～デモ～デモ」と対照する。

考察の結果としては、非難、不信の意味は、ダロウの違った用法と結合して生み出されることがわかった。ダロウの推量用法は、終助詞ネ、ヨ、ニと組み合わされると、場面によって詰問、皮肉などの意味を生じることが分かった。また、ダロウと接続助詞ガの組み合わせは並列表現「～デモ～デモ」と異なって相手に反駁する意味が含まれている。

キーワード：ダロウ、終助詞ネ・ヨ・ガ・ニ、接続助詞ガ、非難・不信感

國立政治大學 National Chengchi University

The blameful meaning of “darou+particle”

Abstract

This paper aims to describe the meaning of combination of Japanese modality “daro”and sentence-final particles “ne”,“yo”,“ga”,“ni”. Begin by apprehending Japanese sentence-final particles “yo”,“ga”,“ne”,“ni”. Further, make clear where the meaning of blame and distrust comes from by each combination. And also discuss the meaning of combination of “daro” and connective particle “ga”.

As a result, the meaning of blame is from the combination of sentence-final particles“ne”,“yo”,“ni” and “daro” which means “conjecture”. On the other hand, the sentence-final particle “ga” conbining with “daro” which means “confirmation” will bring into the meaning of blame or distrust. And the combination of “daro” and connection particle “ga” will bring into the meaning of refuting someone’s statement.

Keyword: modality“daro”, sentence-final particles “ne”,“yo”,“ga” and “ni”, connective particle “ga”, the meaning of blame, distrust

國立政治大學
National Chengchi University

目　次

第一章　序論.....1
1.1　研究動機と目的.....1
1.2　研究範囲と方法.....2
1.3　本稿の構成.....2

第二章　先行研究.....3
2.1　ダロウの位置づけ.....3
2.1.1　寺村（1984）.....3
2.1.2　益岡（1991）.....3
2.1.3　日本語記述文法研究会（2003）.....4
2.1.4　まとめ.....5
2.2　ダロウの意味・用法.....6
2.2.1　森山（1989）.....6
2.2.2　蓮沼（1995）.....7
2.2.3　菊地（2000）.....8
2.2.4　宮崎（2004）.....8
2.2.5　日本語記述文法研究会（2003）.....9
2.2.6　杉村（2007）.....11
2.2.7　まとめ.....11

第三章　ダロウと終助詞.....13
3.1　ダロウネ.....13
3.1.1　ネの機能.....13
3.1.2　先行研究.....13
3.1.2.1　国立国語研究所（1951）.....13
3.1.2.2　伊豆原（1993）.....14
3.1.2.3　鄭（1995）.....16
3.1.3　ダロウネについて.....18

3.2　ダロウヨ.....22
3.2.1　ヨの機能.....22
3.2.2　先行研究.....23
3.2.2.1　伊豆原（1993）.....23
3.2.2.2　蓮沼（1995）.....25
3.2.2.3　日本語記述文法研究会（2003）.....25
3.2.3　ダロウヨについて.....29

國立政治大學 National Chengchi University

3.3　ダロウガ.....31
3.3.1　ガの終助詞的な用法について.....31
3.3.2　先行研究.....31
3.3.2.1　岩澤（1985）.....31
3.3.2.2　石黒（1999）.....32
3.3.2.3　日本語文型辞典（1998）.....32
3.3.2.1　接続助詞ガの基本用法と終助詞的な用法への拡張.....33
A. 対比と逆接.....33
B. 前置き.....35
C. 事情説明.....35
D. 問い返し.....36
E. 言いさし.....36
F. 非難.....37
3.3.2.2　情報の量的関係と質的関係.....38
3.3.3　ダロウガについて.....39

3.4　ダロウニ.....41
3.4.1　ニとノニの位置づけ.....41
3.4.2　ニ・ノニについて.....42
3.4.2.1　ニ・ノニの基本的意味.....42
3.4.2.2　ノニの用法.....43
A.文中.....43
B.文末.....45
3.4.3　ダロウニの意味・機能.....49

3.5　ダロウネ、ダロウヨ、ダロウガ、ダロウニの比較.....52
3.5.1　ダロウネ.....53
3.5.1.1　推量同意と推量確認.....53
3.5.1.2　疑問詞＋ダロウネ.....54
3.5.1.3　「詰問」のだろうね.....55
3.5.2　皮肉のダロウヨ.....55
3.5.3　非難のダロウガ.....56
3.5.4　意外・不満のダロウニ.....56
3.5.5　まとめ.....57

第四章　ダロウと接続助詞ガ.....58
4.1　AダロウガBダロウガにおけるガについて.....58
4.2　AダロウガBダロウガにおけるダロウについて.....60

國立政治大學 National Chengchi University

4.3　AダロウガBダロウガについて.....61
4.3.1　AダロウガBダロウガの意味・用法.....61
4.3.2　他の並列表現との比較.....61

第五章　結論.....66
5.1　ダロウネ.....66
5.2　ダロウヨ.....66
5.3　ダロウガ.....67
5.4　ダロウニ.....67
5.5　並列表現AダロウガBダロウガ.....68
5.6　ダロウと各後続形式.....68
5.7　ダロウの用法の本質.....69
5.8　今後の課題.....70

参考文献.....71
単行本・論文.....71
辞書・辞典.....73
引用小説・ウェブサイト.....73

國立政治大學
National Chengchi University

第一章　序論

1.1　研究動機と目的

周知のように、ダロウは推量を表わすモダリティである。が、学校文法では、ダロウは断定助動詞ダの未然形ダロに推量の助動詞ウの付いたものであるとされている。つまり、推量の中に、多少断定などの意味も含んでいるといえる。そのため、従来の多くの研究[1]では、ダロウについて、断定と対立すると位置づけられている。しかし、以下のような例では、推量の表現とは相当違っている。

(1)　「では、おれの言ったことは忘れないだろうね？」
(『炉ばたのこおろぎ』)

(2)　どうせキミらには分からないだろうよ。トラの存在を信じ、怖がったところを笑い飛ばされ、なにこいつびびってんのとトケラウ人に侮辱された者の気持ちなんて分からないだろうよ。
（http://www.namako.to/tokelau/tiger2.html　2009 年 1 月）

(3)　「増やせまへんか」
「増やせる訳ねぇだろうが。いいかい？電車の中も、バスの中も携帯による迷惑は同じ」　(『漫才』)

(4)　「終わりに行くにつれて良くなったぞ。初めからあの調子だったら、あまり文句も言わずにすんだろうにな」　(『やさしい季節上』)

(5)　「それに狭い部屋に男と二人で入れておくなんて、危険です！刑事だろうが警視総監だろうが男じゃありませんか。」　(『死者の学園祭』)

上の例から見て、ダロウネ、ダロウヨ、ダロウガ、ダロウニ、A ダロウガ B ダロウガは、単純なダロウの推量の意味と較べてやや違っているところが感じられる。例（1）では相手への不信が感じられるが、(2) は嘲り調が感じられ、（3）は非難のニュアンス、(4) は不満・愚痴、(5) は相手への反駁が感じられる。ここに、ダロウの辞書的な意味の「推量」とはかなりの違いが見られる。本稿では、なぜ、ダロウがネやヨ、ガ、ニなどと結びつくと「不信感」や「嘲り」、「非難」などの意味になるのかを本稿の考察対象とし、そこからダロウのより本質的な意味用法を求めることを目的とする。

[1] 寺村（1984)、益岡（1991）など。

1.2　研究範囲と方法

ダロウが終助詞ネ、ヨ、ガ、ニなどと共起する時に、意味の変化について分析するに当たって、ダロウネ等のような一つの語として捉えるのではなく、それぞれの機能を考察する必要があると思われる。それゆえ、分析方法としては、まず各終助詞や接続助詞の担っている意味・機能を個別に考察する。そして、ダロウが各助詞と共起する際に、意味派生のプロセスや意味について分析し、さらにダロウネ、ダロウヨ、ダロウガ、ダロウニとの形式を対照し、その相違を明白にし、最後に、ダロウの基本義を把握する。

また、神尾（1990）は、「話し手または聞き手と文の表わす情報との間に一次元の心理的距離から成り立つものとする。この距離は＜近＞および＜遠＞の2つの目盛りによって測定される」と述べ、情報は話し手または聞き手に＜近＞か＜遠＞かによって、話し手または聞き手の＜情報のなわ張り＞に属するかどうか、というように情報の位置を規定している。本稿でも以下でその概念に従い、話し手をS（speaker）で、聞き手をH（hearer）で表示し、情報の所属は「＞」「＜」「＝」の記号で表わす。

1.3　本稿の構成

本稿の構成を簡単にまとめると、以下のようになる。

第二章：ダロウの先行研究
　　①ダロウの位置づけ
　　②ダロウの意味用法
第三章：ダロウと終助詞の共起
　　①ダロウネ
　　②ダロウヨ
　　③ダロウガ
　　④ダロウニ
　　⑤以上の四者の比較
第四章：ダロウと接続助詞「が」の共起
　　並列表現 A ダロウガ B ダロウガ
第五章：結論、今後の課題

國立政治大學 National Chengchi University

第二章　先行研究

本節では、先行研究におけるダロウはどのように位置づけられるか、またダロウの意味・用法についてどう思われるかを考察する。

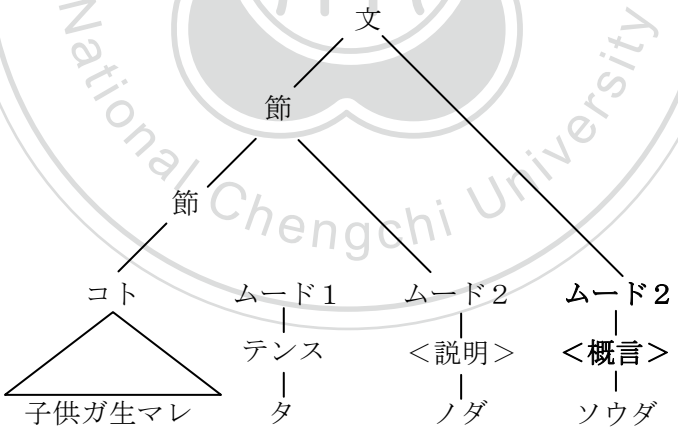
2.1　ダロウの位置づけ

2.1.1　寺村（1984）

寺村は、述語の活用形である確言形はムードの一次的形式であり、あるコトを確かな現実の事実として述べるムードであると認めている。そしてダロウなどの形式は、ムードの一次的形式に後接し、節全体を包むので、ムードの二次的形式とされている。また、これらの形式は伝統文法に従えばすべて助動詞とされている。この二次的ムードは二種に分けられる。一つは「概言」を表す助動詞であり、もう一つは「説明」を表わす助動詞である。

「概言」を表す助動詞とは、ある事態の真偽について、それを自分が直接見たり、経験したりしたのでないから確言はできないが、自分の過去の経験、現在持っている知識、情報から、概ねこうであろうと述べる表現である。ダロウ、ヨウダ、ラシイ、ソウダはこの類に属する。

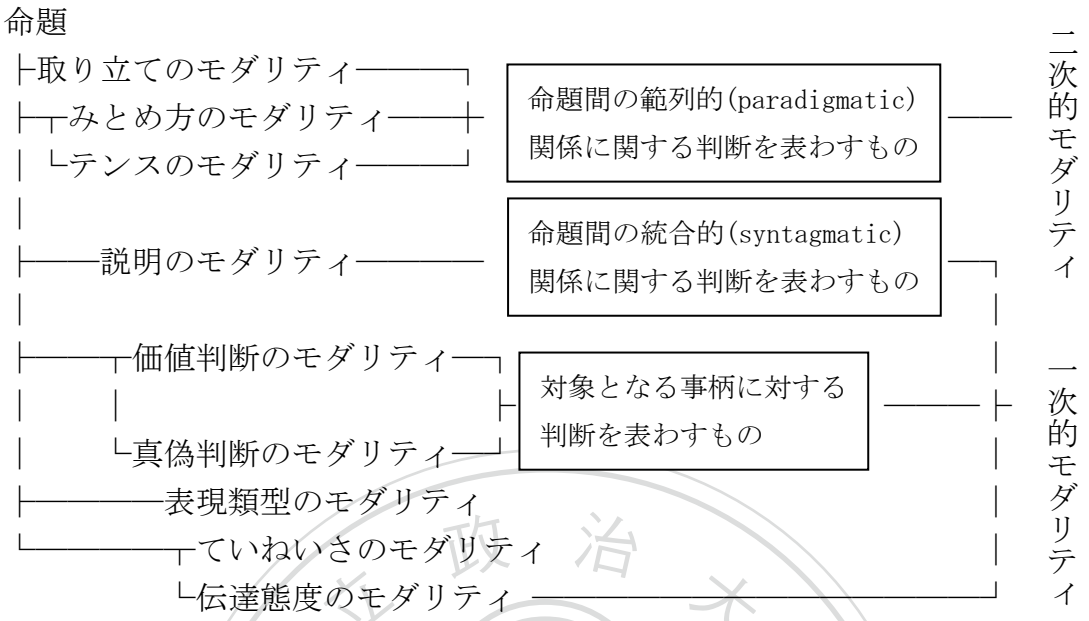
図 1　文の構造　（寺村 1984：pp222）



2.1.2　益岡（1991）

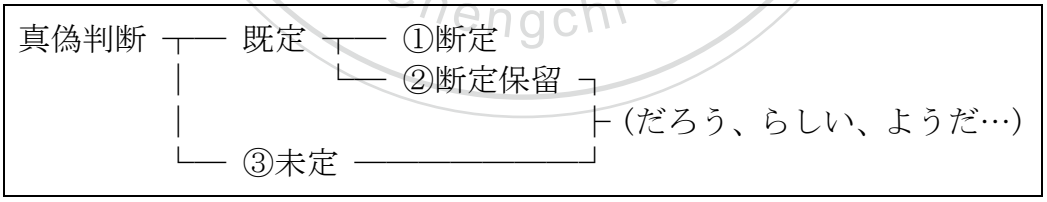
益岡（1991）では、「モダリティ」という概念を「判断し、表現する主体に直接関わる事柄を表わす形式」と規定している。また、モダリティの形式には、恒常的に主観性を表現するものと、客観的表現になり得るもの、の 2 種類がある、と益岡は指摘している。そして、前者を「一次的モダリティ」と、後者を「二次的モダリティ」と呼んでいる。具体的な形式としては九つの種類に分けられ、下図のようにまとめられる。

図 2　モダリティの種類



中で、ダロウは「真偽判断のモダリティ」に属する。真偽判断のモダリティとは、対象となる事柄の真偽に関する判断を表すものをいう。真偽判断のモダリティは、真偽判断の定まっているかどうかによって、「既定」と「未定」という二つの種類に分けられる。また、既定の真偽判断において、事の真偽を確定的なもの、あるいは不確定的なものとして扱うかによって、「断定」と「断定保留」という対立が認められる。すなわち、真偽判断のモダリティ全体は、3 項対立のパラダイムを形成している。以下のように図示することができる。

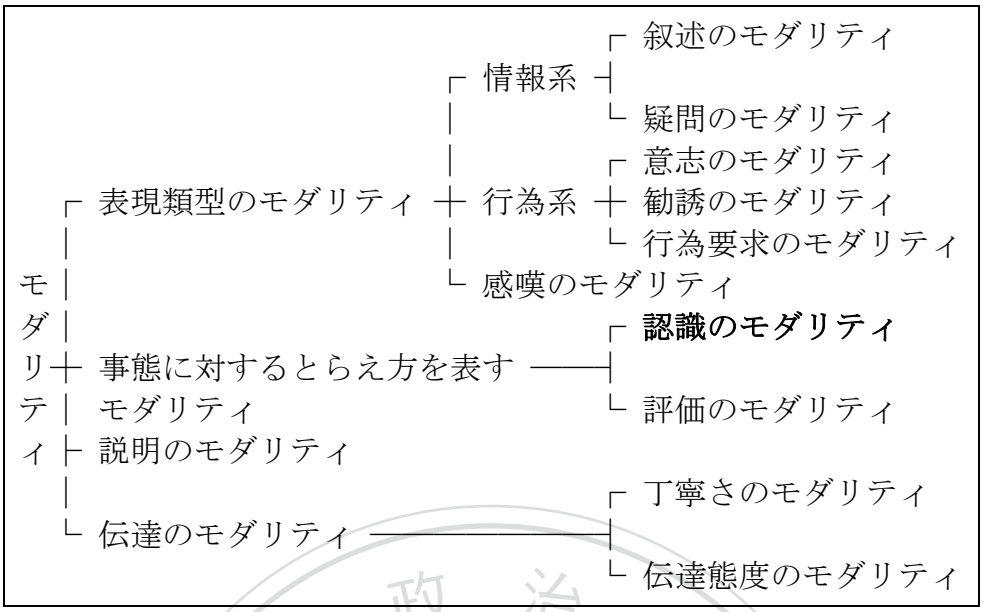
図 3　真偽判断の下位分類　（益岡 1991）



2.1.3　日本語記述文法研究会（2003）

日本語記述文法研究会(2003)では、モダリティを四種類に分けられている。それぞれ、「表現類型のモダリティ」、「事態に対するとらえ方を表すモダリティ」、「先行文脈と文との関係づけを表すモダリティ」、「聞き手に対する伝え方を表すモダリティ」である。ダロウは「事態に対するとらえ方を表すモダリティ」における「認識のモダリティ」におかれている。図示すると下のようになる。

図４　モダリティの種類



ここから、表現類型のモダリティに基づいて、様々なモダリティの相互関係が下表のように整理できる。

表１　各モダリティの相互関係

			評価	認識	説明	丁寧さ	伝達態度
表現類型	情報系	叙述	○	○	○	○	○
		疑問	○	△	○	○	○
	行為系	意志	×	×	×	○	△
		勧誘	×	×	×	○	○
		行為要求	×	×	×	△	○
		感嘆	×	×	×	△	○

（日本語記述文法研究会 2003：pp8）

記号について、日本語記述文法研究会によると、○はそのモダリティが分化できることを、×は分化できないことを、△はそのモダリティの分化に留保や例外現象があることを示している。中に、認識のモダリティは主として叙述文に現れるものであるが、ダロウは疑問文にも現れることができるので、表では△が付けられるのである。

2.1.4　まとめ

以上のように、各先行研究でダロウをどのように位置づけるかをまとめる。それぞれの位置づけの仕方はほぼ類似しているが、いずれもモダリティ（ムー

國立政治大學 National Chengchi University

ド）には段階性があると認めて、2 つの段階に分けられる。しかし、益岡では取り立て詞もモダリティの一種類として取り上げられている。この点は他の研究とやや異なっている。そして、ダロウについては、主として話し手の経験や考え、あるいは現時点の認識によってある事態を判断・叙述する形式であると考えられている。

しかし、同じ認識のモダリティとして、ダロウは他の形式と異なっている。例えば、日本語記述文法研究会によると、認識モダリティの中に、ダロウだけ疑問文に現れる、ということからダロウの特異性を覗うことができよう。

2.2　ダロウの意味・用法

2.2.1　森山（1989）

森山（1989）では、認識のムードについて検討している。認識のムードは、判断すべきコトガラが既に成立してしまったものも含め、そのコトガラに対する認識的な判断を表すもの、とされている。そして、形式においては、ダロウのほかに、狭義蓋然性認識の認識がある。その意味によって、三種類に分けられる。その種類を図示すると、下のようになる。

図 5　認識ムードの下位分類

```
          ┌ ダロウ──────────：ダロウ・マイ
認識の ┤                  ┌ 狭義判断：カモシレナイ、ニ違イナイ
ムード │                  │          （ハズダ）
          └ 狭義蓋然性認識 ┼ 状況把握：ヨウダ、ミタイダ、（ラシイ）
                            └ 情報把握：ソウダ、（ラシイ）
```

森山は、聞き手における情報の有無によって、文を「聞き手情報配慮文」と「聞き手情報非配慮文」に分けている。一般に、平叙文は聞き手に情報がないことを仮定するものであるが、聞き手にも情報があると配慮する場合には、ダロウなどのような形式が必要である、と森山は述べている。

そして、平叙文のダロウの意味としては、二つあると指摘している。一つは蓋然性の判断で、もう一つは聞き手に対して確認を要求するものである。前者は聞き手情報非配慮の伝達であるのに対して、後者は聞き手情報配慮の表現である。

また、森山（1989）では、ダロウガは逆接の形式ガがついているが、なぜダロウガの形式で終止できるかを少し触れている。しかし、ダロウガの機能や意味などについてははっきり説明していない。

國立政治大學 National Chengchi University

2.2.2　蓮沼（1995）

蓮沼は、ダロウの基本的機能は＜推量確認＞であり、＜推量確認＞とは、聞き手の知覚・感情・判断など、本来的に聞き手に帰属する情報や、聞き手の領域情報について、話し手の推測が正しいことを確認する用法である、と規定している。言い換えれば、ダロウは推し量りの射程が聞き手に最終的な判断の決定権があるような事柄に及んだ場合に成立する用法である。例えば、（以下の例は蓮沼（1995）によるものである）

(6)　きのうの夕方、三宮センター街を彼女と歩いていた<u>だろう</u>。

＜推量確認＞のほかに、ダロウに＜認識形成の要請＞と＜共通認識の喚起＞がある、と蓮沼は指摘している。＜認識形成の要請＞は、「通常の認識能力をもっていれば、当然認識できるはず」といった、人間の認識能力についてのメタ認識に基づいて成立していると考えられる。例えば、

(7)　[帰りの遅い夫を非難して]
　　妻：遅いじゃないの。
　　夫：仕方がない<u>だろう</u>。仕事が忙しいんだから。

そして、＜共通認識の喚起＞は当該の事態にまだ気づいていない聞き手に対して、自分と同様の認知状態をその場で形成するように聞き手に誘い込む用法と考えている。＜共通認識の喚起＞の成立のメカニズムも、＜認識形成の要請＞の場合と同様の説明が可能であるが、異なるところは、＜認識形成の要請＞は認識できるはずのことが認識できていないことである、ということを述べている。例えば、

(8)　[タクシーの運転手に行く先を指示して]
　　あそこに郵便ポストが見える<u>でしょう</u>。そのすぐ先の角を右に曲がってください。

ダロウの用法には主に推量と確認要求という二種があると思われるが、蓮沼は従来の研究と異なり、ダロウの用法に、推量と確認を一つの用法として認め、ほかに＜認識形成の要請＞と＜共通認識の喚起＞の用法もあると提案している。しかし、蓮沼は推量と確認を一つのものとする理由を説明していないし、＜推量確認＞が＜認識形成の要請＞や＜共通認識の喚起＞とどのように関連付けるのかについてもはっきりさせていない。

國立政治大學 National Chengchi University

2.2.3　菊地（2000）

菊地（2000）では、ヨウダとラシイの違いを考察しており、さらに伝聞のソウダとダロウとの比較を通して、それぞれの特性を把握している。菊地によると、ダロウは＜見当をつけて予想や創造を述べる＞語であり、観察や推論を伴う場合でも、漠然と（時には無責任に）見当をつける程度でも使えるものである。例えば、正体の分からない料理について、その正体を探る場合、まだ食べたわけでもなく、手がかりもないけど、下のような文が成り立つと思われる。

(9)　「これ、何かな」「さてね。たぶん鶏肉か何かダロウ」
　Cf.（食べた後）「うん、鶏肉のヨウダ。」　　（菊地 2000 : pp56-57）

菊池の考察によって、ダロウは話者の主観的、概略的な判断が含まれる表現ということがわかる。

2.2.4　宮崎（2004）

宮崎は、ダロウの用法には、一般に、推量と確認要求があるとされる。それぞれ次のように定義している。

推　　量 : その事柄に対する話し手の認識が不確かであるということを基本条件として成立する用法。
確認要求 : その事柄に対する聞き手の認識が確かであるということ基本条件として成立する用法。

その中で、ダロウの基本用法は推量であり、確認要求用法は推量から派生したものと宮崎は考えている。その理由は、まず、聞き手の知識に関与的な事柄を聞き手の前で推量することによって、その推量内容の真偽を知っている聞き手を刺激し、その真偽の確定に協力するよう働きかける機能が発生するというメカニズムを仮定できるからである。こうすると、その推量判断が未成立でなければならない。真偽について考えているが、結論がまだ出せないという状態であってこそ、聞き手の協力を仰ぐことができるのである。

また、宮崎はダロウの推量用法には聞き手の認識は不確かでなければならないという語用論的な原則が存在する、と述べている。聞き手の前で聞き手が直接知りうることについては、推量ではなく、確認要求のダロウになる。ただし、聞き手の前で聞き手が直接知り得ることを推量することもある。こうした用法が成立するのは、相手を気遣った発言をする場合である。

さらに、ダロウの確認要求用法は、話し手自身の認識のあり方に基づいて下位分類すると、二つある。一つは＜聞き手依存型＞、もう一つは＜聞き手誘導型＞である。その定義は下の通りである。

＜聞き手依存型＞

話し手自身の認識が不確かな状況で、確かな情報を有していると見込まれる聞き手の応答に依存してその情報の確定化を図ることである。

(10) もしかして、君、嘘ついてるだろう。（下線筆者）

＜聞き手誘導型＞

話し手自身の認識が確かな状況で、聞き手にその情報を認識するように働きかけることである。

(11) よく見ろよ。君の計算、間違えてるだろう。（下線筆者）

従って、ダロウの用法について図示すると、下のようになる。

図 6　ダロウの用法

ダロウ ― 推量
↓
（派生）
└ 確認要求 ┤
┌ 聞き手依存型（話し手の認識：不確か）
└ 聞き手誘導型（話し手の認識：確か）

二つの用法をまとめてみると、次のような相違があると認められる。

表 2　推量と確認要求の比較

	推量	確認要求
共起できる形式	「タブン」等の確信度表示副詞 終助詞「ナア」など	ホラ
出現位置	文末・文中	文末のみ
イントネーション	下降調のみ	上昇調・下降調
テクストのタイプ	独話・対話	対話のみ
話し手の認識	不確か	①確か　：聞き手誘導型 ②不確か：聞き手依存型
聞き手の認識	①原則不確か ②確かな場合：聞き手への気遣い	確か

2.2.5　日本語記述文法研究会（2003）

日本語記述文法研究会（2003）では、認識のモダリティを断定と推量に二分

している。両者はいずれも話し手が事態の成立を主張することであるが、断定は事態を経験や知識によって直接的に認識しているのに対して、推量は想像や思考によって間接的に認識している、と定義されている。そして、ダロウの意味・用法について次のように挙げられる。

(12)

① 話し手の記憶にあることや自身の行動予定など、ダロウを用いることが出来ない。そうした場合に、「かもしれない」や「と思う」を用いるのが普通である。

a. 急いでいたので、エアコンを切らずに来た｛かもしれない／？だろう｝

②想像・思考の中に捉えた事柄を描き出すので、仮定条件の帰結として、ごく自然に用いることが出来る。

鈴木氏が委員長になれば、会議は早く終わるだろう。

③ 主張を控えめにする断定回避の用法がある。

a. 君はもっと努力すべきだろう。

b. 今回の作戦は失敗だったと言えるだろう

④ 推量から派生した確認要求の用法がある。話し手が推量した内容を聞き手に問いかけたり、眼前に存在している状況について聞き手の注意を喚起したり、話し手の知識や記憶を確認したりする用法である。

a. 君、昨日徹夜しただろう？

b. ほら、あそこに信号があるだろう

⑤〔名詞＋だろう〕の形で表わす、ものを確認しながら例を挙げていく用法

a. あのとき会場にいたのは、佐藤だろう、鈴木だろう、田中だろう、それから、山本もいたなあ。

⑥「だろうと」という形で、「であっても」に相当する逆接条件節を形成する用法

a. 相手が誰だろうと、彼女の父親は結婚を認めないにちがいない。

以上のように、ダロウの意味用法を詳しく考察されているが、その共通点を取り上げて、次のようにまとめられる。

國立政治大學 National Chengchi University

表 3　ダロウの意味・用法

	意味	用法
①②	推量	事態を想像や思考によって間接的に認識している。
③	断定回避	主張を控えめにする。
④⑤	確認要求	話し手が推量した内容を聞き手に問いかけたり、眼前の状況について聞き手の注意を喚起したり、話し手の知識や記憶を確認したりする。
⑥	逆接	「だろうと」の形で、逆接を表す。

2.2.6　杉村（2007）

杉村（2007）では、蓋然性を表す文末形式「ダ／φ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」「ヨウダ」「ラシイ」「ダロウ」について考察していて、ダロウを次のように定義している。

（13）証拠不足のため当該の認識や推量判断が確証できないことを表す。
（杉村 2007：pp124）

上に挙げたのは推量文におけるダロウの働きであるが、非推量文の時、ダロウは推論過程を経ていない、断定を避けた婉曲的な言い方と確認要求の機能を働いていると、杉村は述べている。（下例は杉村による）

（14）むかしから家の中ネズミは地震の前にさっさといなくなってしまうという　火山が噴火する前に山からぞろぞろと動物たちが逃げ出す　船が沈むと感じた犬はけっしてその船にはのらないというでしょう
（15）「国会の証人喚問も相当きびしかったけど、検事さんの調べはもっときついでしょう」

しかし、上例の説明は不適当なところがあると思われる。（14）は婉曲表現ではなく、確認要求の表現であると、（15）は文脈から見ると推量文であると考えられる。にもかかわらず、杉村の考察によって、ダロウは推論過程を経るかどうかによって用法を分けられる、ということが分かる。推論過程があるものは推量の用法であるが、推論過程のないものは確認要求や婉曲表現であると認められる。

2.2.7　まとめ

以上の先行研究を通じて、ダロウの意味・用法については以下の四つあるとわかる。

表 4　先行研究のまとめ

A.	推量	森山：聞き手情報非配慮
B.	確認要求	森山：聞き手情報配慮 宮崎：聞き手依存型と聞き手誘導型
C.	婉曲／断定回避	日本語記述文法研究会／杉村
D.	逆接	森山：だろうが 日本語記述文法研究会：だろうと

しかし、ダロウの基本的な用法は何か、またはその周辺的な用法とどのように関連付けるかについてあまり言及していないようである。なぜダロウと終助詞ネが共起すると非難の意味が生じてくるかなどの問題は、うまく解釈できない。それ故、より詳しく検討する必要があると思われる。本稿では、先行研究を踏まえて、話し手と聞き手の間に認識のずれが存在しているという観点でダロウを推量と確認要求という用法に分けている、と考えている。さらにダロウと各終助詞や接続助詞との共起状況を考察していくことにする。

國立政治大學 National Chengchi University

第三章　ダロウと終助詞

この章ではダロウと終助詞の共起状況を考察していきたい。考察対象としては終助詞ネ、ヨ、ガ、ニである。

3.1　ダロウネ

3.1.1　ネの機能

ネの基本的な機能は「話し手が聞き手に情報の確認を要求する」ということである。情報所有の観点から考えれば、ネには、話し手（S）と聞き手（H）との間に同じ量の情報を持つことと、聞き手の方がより多くの情報を持つこと、という二つの場合がある。つまり、その構造はS≦Hとなっていると思われる。だが、その観点では、下のような表現をうまく説明することができない。

（16）今後の指導については、親は真剣に考えなくちゃいけませんね。家庭の雰囲気と親の考え方は、指導の一つの決め手になるのですから。
（『日本の父へ』）

（17）「では、おれの言ったことは忘れないだろうね？」
（『炉ばたのこおろぎ』）

上のように、(16)ではネは話し手の評価を和らげるという働きをしているが、（17）は相手にあることを確認してほしいように詰問する。このような和らげや詰問などの表現がどのように生み出されるのかは、本節の検討対象である。従って、以下は先行研究を通してネの機能を把握し、さらにその派生的意味について検討していきたい。

3.1.2　先行研究

3.1.2.1　国立国語研究所（1951）

まず、国立国語研究所（1951）により、ネの種類は四つ挙げられる。

（18）

① 軽い詠嘆の気持を含む判断
　a.　「いい柄ね、ちょっと見せてえ」

② 軽い主張、念を押す気持
　a.　「いくら金持ちでも、いくら貧乏人でも、それ相当に楽しめる世界だからね。」

③ 同意を求める。返答を促す
　a.　あんな大彗星はめったにあらわれないでしょうね

④ 質問・詰問

a. 「三人の中では白木君が戦後派のピッチャーだが、戦争前の野球と較べたあら、今の打撃そのものが、昔と今と大分変わって来ていやしないかね」（下線筆者）

ある物事について話し手が不確かな時などに、聞き手の意見や同意を要求するという用法は、ネの典型的な用法であると思われるが、国立国語研究所の分類はやや不適当なところが見られる。

例えば、①は、一見、話し手が独り言のように判断を述べて感嘆するようであるが、実際に誰か他の人が側にいないと、ネを使うのはおかしい。

ネは、基本的に話し手が聞き手にある態度を伝達するときに使われるものであるため、①a を例にすれば、人が側にいないで、自分だけで感動した時「いい柄。」と、ネを使わずに発話するであろう。それ故、①は、自分の考えを相手に同意を求めるとのような分類にしたほうがよかろう。なお、②と③も同じものと思われる。

最後に、④は「質問・詰問」に分類されるが、挙げられた例には、ネだけでなく、疑問を表わす疑問詞「か」も現れている。意味上は、疑問文と類似しているが、聞き手に情報を要求するほかに、話し手が自分の主張や考えを聞き手に伝えて、確認してほしいという働きもしていると見られる。

上の検討によって、国立国語研究所（1951）の分類を修正すると、以下のようにまとめられる。

表 5　国立国語研究所の分類の修正

国立国語研究所		修正後の分類
①軽い詠嘆の気持を含む判断	⇨	話し手の考えについて相手に同意を求める
②軽い主張		
③同意を求める		
④質問・詰問	⇨	話し手の考えを相手に確認する

3.1.2.2　伊豆原（1993）

伊豆原（1993）は、ネの中心的な機能は、聞き手に話し手と同じ気持・情報を共有させようとする話し手の働きかけである、と認めて、さらにネの構文上の位置などから 3 類 7 種に分類した。ここで簡単に紹介する。

A 型：話し手が談話を展開しているとき、話し手の始めた（る）話を聞き手に持ちかけ、聞き手をその話の中に引き込むもの。

A－1 型：話し手がこれから始めようとする話、これまで進めてきた話に聞き手を引き込もうとする。

例　A：ねえ。
　　B：うん。何。

A－2 型：話し手が聞き手の受けを確認する形で話を進めている。

例　回答者：…ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね、（はい）洗剤を入れますとね、（はい）洗剤を入れると水の性質が変わってね、表面張力が弱くなるのよ。そうするとぶくぶくってね、｛アメンボが｝もぐっちゃう。（子ども電話相談）

A－3 型：聞き手に状況を説明したり、状況を目に見えるように伝えたりするときに使われ、聞き手との間に話題への一体化・共有化が図られる。

例　…ところが 6 年生になってみたら、受験組だけを集めて補習授業があったね。

B 型：話し手が聞き手の発話を受け、話題・情報を共有しようとしていることを表わし、聞き手への一体化を図ろうとするもの。

B－1 型：ネが使われることによって聞き手への働きかけが明確になり、聞き手の気持への一体化が示される。

例　参加者 B：…だから、単純なものではないような気がしますね。（なるほどねえ）だからへたすると…　（座談会）

a　B－2 型：断定的で一方的な印象を和らげ、話題・情報の共有化の上に会話が成り立っていくという印象を与える

例　参加者 C：…宇宙船やね、人工衛星なんか金箔でおおいますよね。ですからその当時のハイテク技術（そうですね）金を使ったハイテク技術（そうですね）

② C 型：話題や情報が既に話し手と聞き手の間で共有されているとき、話し手が聞き手に同意や確認をしたり、同意や確認を求めるもの

a　C－1 型：単独で用いられるネである。

例　回答者：ええ、たとえば朝顔とかひまわりの花知ってますか。（知ってます）あれは種がなりますねえ。（うん）ねえ。（うん）

b　C－2 型：聞き手の積極的な受けを要求する。ネは必須成分で、ネがなければ話し手側の一方的な伝達になってしまう。

例　相談者：ええと現在も働いております、中学校出てから。
　　回答者：ああそうすると中学校卒業後すぐに（はい）働きに出たわけですね。
　　相談者：はいそうです。　（電話教育相談）

以上の用法をまとめると下のようになる。

表６　ネの類型　（伊豆原 1993）

類型	談話の進行方向	位置	コミュニケーション機能
A－1	話し手→聞き手	単独	持ちかけ
A－2	話し手→聞き手	語末・句末	持ちかけ
A－3	話し手→聞き手	文末	持ちかけ・共有化
B－1	話し手←聞き手	語末・文末	共有化
B－2	話し手←聞き手	文末	共有化、同意・確認
C－1	話し手→聞き手	単独	同意・確認
C－2	話し手→聞き手	文末	同意・確認

（↓で共通するものを示す）

伊豆原（1993）は終助詞のネだけでなく、間投助詞のネも含んで考察している。しかし、本稿はダロウネを考察するもので、文末表現の考察のみを進めたい。それ故、ダロウと共起できるものも必ず文末に現れるはずであるので、上に挙げたネの用法の中に、文末のネ、つまりA－3、B－１、B－2、C－2の用法だけを選び出し、考察の対象とすることにする。

また、伊豆原の分類について、A－3、B－１、B－2の用法は似通っていると思われる。いずれも「聞き手との間に話題への一体化・共有化が図られる」というように分類すればよかろう。伊豆原の挙げた例を見てみると、ネと結合する文はそれぞれ事実を表わす文（A－3)、あいづちの文（B－１)、断定を表わす文（B－2)、と分かる。それ故、「一体化」や「働きかけ」、「和らげ」などの意味が生じてくるのは、ネ自身からではなく、これらの文と結合することによって生み出されたのである。つまり、ネの本質は変わりはなく、結合した文によって、その文脈から異なりの意味が派生してくるのである。従って、A－3、B－１、B－2におけるネは実は同じ種類に分類すべきものではないかと考えられる。

3.1.2.3　鄭（1995）

鄭（1995）では、ネを確認要求と同意要求とに大別することを提案する。

① 確認要求：話し手より、聞き手が優位にあると見込まれ、聞き手の情報を確認するニュアンスを持つ。
② 同意要求:話し手と聞き手が、情報的に同等の関係にあると見込まれ、聞き手に同意を求めるニュアンスを持つ。

二種類のネは、応答の仕方から区別できる。鄭は下の例を挙げて説明する。

(19) 「あ、失礼しました。星泉さんですね？」
「a. 星泉です／a’. ハイ、ソウデス／b. ＃ソウデスネ」
(20) 「悪戯にしたら厭味な悪戯ですね」
「a. ＃そうだ／b. そうだね」[2]　（下線筆者）

上のように応答の仕方が分類の根拠になるのは、ネが要求表現だからである。(19) のように確認要求の用法が Yes-No 疑問文のカと同様に、聞き手の情報を要求する表現なので、話し手の期待する情報が聞き手の応答に具現されるからである。一方、(20) のように同意要求のネは単に聞き手に情報の同意を求めているので、同意表示のネを付けた応答が自然である、と鄭は述べている。

以上の先行研究によって、終助詞ネは大きく二種に分けられることが分かる。

表 7　ネの先行研究のまとめ

国立国語研究所（修正後）	伊豆原		鄭
話し手の考えについて相手に同意を求める	C-2	話題や情報が既に話し手と聞き手の間で共有されているとき、話し手が聞き手に同意や確認をしたり、同意や確認を求めるもの	確認要求
話し手の考えを相手に確認してほしい	A-3	話し手の始めた（る）話を聞き手に持ちかけ、聞き手をその話の中に引き込むもの	同意要求
	B-1	話し手が聞き手の発話を受け、話題・情報を共有しようとしていることを表わし、聞き手への一体化を図ろうとするもの。	

上の整理の仕方は、情報の優位によって分類したものである。すなわち、コミュニケーションの時、話し手と聞き手のうち、どちらがより多くの情報を所有しているか、の問題である。ここで主として鄭の分類に従って、話し手が仮定する情報量の観点から、話し手が聞き手より情報を多く持っている場合（S＞H）を「確認要求」と呼ぶことにする。一方、「同意要求」は、話し手と聞き手の持っている情報が同量の場合（S＝H）を言う。

しかし、伊豆原（1993）による、B-2 のような「断定的で一方的な印象の和らげ」という表現もあるが、しかし最初にあげた例(2)のような「詰問」の表

[2] (21) の場合は、聞き手が情報的に優位であるので、応答の述語に同意を表わすネを付けない方が自然であるが、(22) の場合は情報同等の関係にあるので、ネをつけなければ、話し手がその情報を独占しているような印象を与える。(鄭 1995：pp265)

現はどうなるのだろうか。この二つの用法は話し手と聞き手が持っている情報の量と関係がなく、発話者が内容を述べる際の相手に対する態度と認められよう。そのような表現はここで「発話の態度」と仮称する。また、情報の観点を繰り返してみると、「和らげ」と「詰問」の文はそれぞれ「確認要求」と「同意要求」に属するはずである。すなわち、「和らげ」と「詰問」はそれぞれ「確認要求」と「同意要求」から派生した用法と推測できよう。

上のことを整理すれば、下の表になる。

表８　ネの用法

情報量の多寡	1.　同意要求（S＝H）
	2.　確認（S＞H）
発話の態度	3.　和らげ（同意要求から派生した用法）
	4.　詰問（確認から派生した用法）

3.1.3　ダロウネについて

前節でネの用法について検討し、1. 同意要求、2. 確認、3. 和らげ、4. 詰問、四つの用法を挙げた。ダロウと共起する際に、ダロウとネはそれぞれどんな働きを表わすのか、本節で考察していきたい。まず、例を見てみよう。

(21)「どこへ行くの」
横尾の問いに、ふりむいて言った。
「そんなこと言えるか。いまからは競争なんだからな」ちょうど客を運んできたタクシーをつかまえ、乗り込んでUターンさせ、たちまち俺達の視界から消えてしまった。
「タクシーか……」
横尾が首をふってつぶやいた。
「あの人のことだから、家へまわってお金をもらって、そのまま会社まで乗りつけるんだろうねえ」
「しかし、それは安易なやり方だと思うな」
亀丸が並べられた自転車を見、むこうのシャッターを降ろしたパチンコ屋に眼をやり、手の平の百円玉を見つめて言った。
（『かんちがい閉口坊』）

(22)「おまえはまだ知らないだろうね。話しちゃいけないことだけど、自殺だったらしいの」（『日本の父へ』）

上の例で示されるように、(21) は横尾のこれからの行動について、話し手（亀丸）が推測して、さらにそばにいる聞き手も同じ考えを持っているはずで

あろうと想定して、聞き手に同感させることを図っているシーンである。すなわち、話し手も聞き手も共に、同じ情報を持っていると話し手は想定し、ネを用いて相手の「同意」を要求するのである。それに対して、(22) は話し手が、聞き手が事件について知っているかどうか分からないで、単に一方的に確認する場合である。情報量から見れば、(22) における情報量は「S＜H」のようになっていて、ネは「確認」の用法と思われる。

また、ダロウの部分を見てみると、(21) は話し手と聞き手が両方とも知っていることについて、話し手が相手に確認する用法である。すなわち、「確認要求」を表すダロウである。さらにこの場で、ダロウは「断定を和らげる」という効果も認められる。一方、(22) の場合、話し手が聞き手の認識を知らずに、話し手自身がそう想定するということで、ダロウは「推量」の用法であると考えられる。ここで簡単に下のように整理する。

表 9　ダロウとネの組み合わせ

例	ダロウ	ネ
(21)	推量	同意要求
(22)	推量	確認

前例と同じものがよく見られる。例えば、次の (23) は「推量＋同意要求」の形式で、(24) と (25) は「推量＋確認」である。このような組み合わせはまさにダロウネの基本的な用法といってもよかろう。

(23) 君の手紙をよくよく拝見した。実のところ、君はこんな手紙を書けるほどの人物とは思わなかった。こんな言い方は失敬だろうね。
（『塩狩峠　道ありき』）

(24) 「肺結核の特効薬は今のところ何もないからね。洞爺のようないい気候のところで、大気安静療法をするより仕方がないだろうね」
（『氷点』）

(25) 「このあたりには宿泊施設もないだろうね」とカガノンが言った。「勿論、泊まる気なんかないが」　（『アマノン国往還記』）

実は、(21) ～ (25) におけるネを取り除いても、全文の命題真偽価値はあまり変わりはない。なぜならば、ネのあらわす機能は、ダロウと重なっているからである。ダロウとネが同時に出てきた場合、ダロウは命題に対して推測をすることで、ネは対人機能を果たす、というようにそれぞれ異なった役割を担っていると考えられる。

次に、命題は疑問詞疑問文の場合、ダロウネはどんな働きをしているのかを検討してみたい。

國立政治大學 National Chengchi University

(26) 「北山、君も頭がにぶいね。警部の考えはおそらくこうだと思う。つまり人間は寝る時たいていは照明を暗くして寝るはずだから、天井の明かりは消す。そのかわりに枕元のナイトランプをつけるはずだ。ところが君の部屋のナイトランプは切れていた。それで部屋の中は真っ暗だったはずだ。すると人間というものはどういったことを連想したり、感じ入ったりするものだろうね。」

「君はいったい何を言いたいんだね。」

(『トリック上の殺人者』)

(27) 「大手製薬会社と言えども、利益が上がらなければ、倒産してしまうから、どうだろうね。他の薬は利益を上げるといっても、兼ね合いが難しいだろうし。倒産しては元も子もないからね」

「それはそうだね。大手製薬会社が束になっても、世界に三千六百十万人というエイズ患者に治療薬を提供することは難しい。」

(『世界を翔ける男』)

(26) は、話し手が不確かなことについて推量をして、相手の考えを確認するというより、むしろ話し手がすでに結論を出していて、聞き手に伝えることを通じて、聞き手の反応を見ることを図っていると言ったほうがよいだろう。(27) は (26) と似通っていて、「どうだろうね」によって、話し手自身の意見を言い切ることを避けている。この二つの例では、ネを外して単にダロウだけの文を見てみると、いずれも独り言のよう自問自答をすることが感じられる。なぜならば、命題は不確かなものからである。そして、対人機能を有するネを付加すると、元の独り言のような表現から相手向けの対話文になる。その場合、ネは聞き手の同意を求めるという機能を果たしている。

また、形式上はいずれも疑問文であるが、意味上は相手に情報を要求するのではなく、自分の出した意見や判断をぼかす一方、聞き手の様子を覗くという働きをしている。すなわち、「修辞疑問[3]」の表現と認められる。なお、こういう表現は単にダロウかネかの一方が現れるだけではできないため、両者の共起頻度は高いといえよう。ただし、「疑問詞＋ダロウネ」の全てが「修辞疑問文」とは限らない。純粋な疑問文を表わすことがある。「修辞疑問」を表すかどうかを判断するには文脈が必要である。

他に、同じダロウネの形式で、意味上は「詰問」をしていることもある。例えば、先の例 (17) と下の例 (28) である。

[3] 修辞疑問（Rhetorical Questions）とは、相手の答を求めるのではなく，話し手の意図する内容を聞き手に納得させるために反語的に疑問文の形にして述べたものをいう。（ロイヤル英文法改訂新版 CD-ROM）

(17)「では、おれの言ったことは忘れないだろうね？」

(28) 歩み寄った二人は握手した。「君は昔の君なんだろうね」と、エーリヒは真面目な旧友の顔を間近に見ながら言った。　　(『みずうみ』)

上の例、実は（22）と同じく【推量のダロウ＋確認のネ】」という組み合わせである。しかし、この「詰問」の意味は、文脈から出てくるものである。表面的には話し手が聞き手に確認するという表現であるが、発話の背後には、「忘れるとだめだよ！」や「そうじゃないと困るぞ！」などのような意図が隠されており、相手に一種の不信感を持っていることも感じられる。これは明らかにグライスの「量の公理[4]」の逆用（exploitation）であり、相手に会話に出てこない意味、つまり言外の意味を推測させることを企てているといえよう。従って、前節で掲げたように、ネには、「詰問」の用法があるが、ダロウと共起しなければ、「詰問」にならない。すなわち、ネの詰問の働きを発動する条件はダロウと共起することであると思われる。

さて、以上の考察をまとめていきたい。まず、（21）～（25）では、ダロウは確認で、ネは同意・確認のいずれも可能である。意味から考えれば、それぞれ本来の意味とほとんど同じだと思われる。さらに、これらのネは省略しても文に影響を与えない。

次に、（26）～（27）について、形式は疑問詞疑問文であるが、これらの文

---

[4] グライスの「協調の原理」については、小泉（2001：39-40）に従う。下の「公理」とは、行動原理もしくは行動指針のことである。

1. 量の公理（Maxim of Quantity）
   Make your contribution as informative as is required for the current purposes of the exchange.（あなたの貢献を、当のやりとりのその場の目的のために必要なだけの情報を与えるようなモノにせよ。）
2. 質の公理（Maxim of Quality）
   Try to make your contribution one that is true, specifically
   （あなたの貢献を真であるものにすべて努めよ、とりわけ）：
   （ｉ）do not say what you believe to be false.
   （偽りであると思っていることを言うな。）
   （ii）do not say that for which you lack adequate evidence.
   （十分な根拠のないことを言うな。）
3. 関係の公理（Maxim of Relation）
   Make your contribution relevant.
   （あなたの貢献を関連のあるモノにせよ。）
4. 様態の公理（Maxim of Manner）
   Be perspicuous（明解な言い方にせよ。）：
   （ｉ）avoid obscurity.（不明瞭な言い方をせよ。）
   （ii）avoid ambiguity.（あいまいな言い方を避けよ。）
   （iii）be brief.（簡潔な言い方をせよ。）
   （iv）be orderly.（順序だった言い方をせよ。）

脈における語用論的な意味は「修辞的疑問」である。疑問詞の出現のため、ダロウとネは、ある文脈の中では元の推量や確認などの用法から逸脱して、「修辞疑問」になって判断を避けるという機能を帯びてくる。この際、このネは必要である。

最後に、(17) と (28) を見ると、形式は (22) などの例と同じだが、「詰問」の意味を表している。それは話し手の発話する際に、充分な情報を相手に与えずに、言語にならない情報を相手に推量させるというプロセスから生み出されたのである。言い換えれば、「詰問」はダロウネから生じた語用論的表現であろう。

以上の考察を表にして表すと、次のようになる。

表 10　ダロウねの用法

	命題	だろう		ね		結合後の用法
		省略可能性	用法	省略可能性	用法	
基本的	平述文	×	推量	△	同意要求	同意要求
↓		×	推量	△	確認	推量確認
↓	疑問詞疑問文	×	自問自答	×	同意要求	修辞疑問
↓ 派生的	平述文	×	推量	×	確認	詰問

3.2　ダロウヨ

3.2.1　ヨの機能

ヨは、「聞き手の知らない情報を伝える」という基本的な機能を持っている。従来の研究では、常にネと共に取り上げて比較されている。例えば、「あの映画、おもしろかったね。」と「あの映画、おもしろかったよ。」の違いを見てみよう。前者は話者も映画を見たと受け取れるのに対し、後者は話者しか映画を見なかったと受け取れるだろう。ここから、ネと違ってヨは「聞き手の知らない情報を知らせる」という機能がプロトタイプとして存在すると考えられる。これが、情報世界における典型的な【S＞H】の構造である。

また、ヨは命題が特定の聞き手に向けられたものであることを示すコミュニケーション機能を持っている（つまり、対人モダリティ）。例えば「雨が降ってきた。」と言うだけなら単なる描述文で独り言とも取れるが、「雨が降ってきた<u>よ</u>。」と言えば「雨が降ってきた」という情報が聞き手に向けられたものであることを示すことになり、「傘を持って行け」「洗濯物を取り込め」などの提案や要求も含意されていると受け取れる。

國立政治大學 National Chengchi University

しかし、上述の観点では、次のような例をうまく説明し得ないと思われる。

(29) どうせキミらには分からないだろうよ。トラの存在を信じ、怖がったところを笑い飛ばされ、なにこいつびびってんのとトケラウ人に侮辱された者の気持ちなんて分からないだろうよ。
（http://www.namako.to/tokelau/tiger2.html　2009 年 1 月）

上例のように、情報を伝達するというより、むしろ聞き手への嘲り・皮肉といったものが感じられる。それはヨの基本的な意味と随分違っていると思われる。本節では、先行研究を通してヨの意味・機能を把握し、さらにその派生的意味について検討する。

3.2.2　先行研究

3.2.2.1　伊豆原（1993）

伊豆原は、コミュニケーションの観点と構文上の位置からヨを 2 類 5 種に分類している。結論として、ヨ話し手の情報・判断・気持ちなどを一方的に持ちかけるものであり、ヨの使用がくどさや押し付けがましさなどを感じさせるためである、と伊豆原は述べている。以下、その分類についてまとめて紹介する[5]。

D 型：話し手が談話を展開していくとき、話し手の判断や話し手の持っている情報を聞き手に持ちかけ、伝えようとするもの。

D－1 型：単独で用いられる。呼びかけである。

例　A：よ、元気。
　　B：うん、元気。

D－2 型：聞き手の気持に関わりなく一方的に話を進めていくときの持ちかけであり、ぞんざいさ、押しの強さが感じられる。（語末・句末につく「よ」で A－2 型に対応する）

例　それでミヤザワさんよ、あんたがもうちょいとアメ車をかってくれたらよ、誰もショーウィンドーにレンガ（保護主義）なんかなげこまないように、オレが面倒みてやるからよ。

D－3 型：A－3 型の「ね」に対応するもので「よ」の前には「～んです」「～わけです」がくることが多い。可能性としては「ね」「よ」「よね」「φ（何もつかない）[6]」のいずれが使われてもかまわ

[5] 伊豆原（1993）はネとヨについて分析しているものである。まず「ね」についてA、B、Cという三つのタイプに分類し分析している。次にヨをDとE、二種類に分けて検討する。以下のまとめは、同論文におけるヨのD、E型に限る。
[6] つまり、ゼロ記号。

ない。

例　ところがええ、当時はですね、もう 30 代ですよ、よろしいですか、30 代で脳内出血とかね、あったんですよ。30 代、男ですね。（はあ）30 代でなくなる人もいたんです。でそれは男なんですよねえ。あと、ガンもね、ほんと沢内はガンが多いんですよ。

D－4 型：文末に置かれ、「よ」の前には「～です」「～ます」がくる。談話内容を聞き手に持ちかける働きをする。

例　…ですから今でも 70 代 80 代のお年寄りにですね、何人子ども産んだかって聞くと知らない人いますよ

E 型：話し手が、聞き手の（確認の）発話に対して同意もしくは不同意の意を持ちかけるもの。「よ」の前には「～です」「～ます」がくる。「よ」がないと断定的な印象が強く、「よ」の使用によって同意あるいは不同意だという話し手の気持ちを伝えることになる。

例　そうするとその健康台帳作って（ええ）一人一人のですね（一人一人のですよ）健康管理をし始めていくときに…（同意の例）

例　A：私なんかだめだわ。
　　B：そんなことないよ。（不同意の例）

ヨの用法をまとめると下のようになる。

表 11　ヨの用法　（伊豆原 1993）

類型	談話の進行方向	位置	コミュニケーション機能
D－1	話し手→聞き手	単独	呼びかけ
D－2	話し手→聞き手	語末・句末	持ちかけ
D－3	話し手→聞き手	文末	持ちかけ
D－4	話し手→聞き手	文末	持ちかけ
E	話し手←聞き手	文末	持ちかけ＋同意／不同意

伊豆原の分析では、間投用法のヨも含んで考察してくる。だが、ダロウと共起しているのは文末のヨしかないので、ここで考察対象を D－3、D－4、E という三つの用法に限る。

そして、分類について、D－3 と D－4 はネと対照し分類するもので、ヨの機能によって分類するわけではないので、D－3 と D－4 におけるヨは同じものと考えられよう。

また、意味から考えれば、E 型における発話者の同意か不同意かは、いずれも話し手の判断に属しているので、さらにに分類する必要はないと思われる。従って、伊豆原のあげたヨの用法は、「話し手の判断や話し手の持っている情報を聞き手に持ちかけ、伝えようとするもの」と定義すればよいと思われる。

3.2.2.2　蓮沼（1995）

蓮沼はヨの基本的機能を「認識上の何らかのギャップが存在する文脈で認識能力の発動を促し、認識形成を誘導する標識である」と考えている。

その中に、「認識のギャップ」は、「気づいていないことや忘れている理由などで、話し手または聞き手の側に認識の欠落が生じている状況や、両者の間に情報の把握や発話意図の解釈などをめぐって食い違いや誤解・無理解が生じているような状況のこと」を指している。そしてヨによって、そのキャップを補完・補充すると、蓮沼は考えている。たとえば、「もしもし、切符を落とされましたよ」（下線筆者）という例におけるヨは、聞き手の注意を喚起し、それに気づかせる機能を有している。

蓮沼の指摘のように、話し手と聞き手の間に認識上のギャップ存在しているため、ヨによって、そのギャップを補完する。しかし、このような観点として3.2.1 の例を説明するのは、やはりふさわしくないと思われる。

3.2.2.3　日本語記述文法研究会（2003）

日本語記述文法研究会（2003）では、ヨは「その文があらわす内容を、聞き手が知っているべき情報として示すという伝達態度を表す」と定義している。そして、その用法を下のような五種にまとめている。

1. 聞き手に注意を促す
2. 説明を行う。「のだ」の機能と重なっているため、同時に出る場合は、「よ」がなくてもそれほど大きな違いがないことが多い。
3. 聞き手に対する非難や皮肉を表わす。この場合、上昇イントネーションをとることが多い。
4. 自分の知識や能力を正当に評価していない聞き手に抗議するニュアンスを強める。この場合は下降イントネーションをとることが多い。
5. 相手からの依頼を受け入れる返答。上昇イントネーションによって、相手の心理的負担を軽くするようなニュアンスが示される。

それぞれの用法に下の例を挙げられている。（下線筆者）

(30) あ、切符が落ちました｛よ／?φ｝
(31) ［運転者に］赤信号だ｛よ／?φ｝。ちゃんと前を向いて運転してよ。
(32) A「あれ？こんなところでどうしたんですか」
　　B「実家がこの近所なんですよ」
(33) A「何を買うの？」
　　B「新しい本棚です。入りきらない本があふれているんですよ」

(34) A「うるさいなあ。朝っぱらから何だい？」
B「もう 2 時だ<u>よ</u>。朝じゃないぞ」
(35) 君、こんなスピードで突っ込んでくるなんて、自殺行為だよ。
(36) A「君、株のことなんかわかるの？」
B「わかるわ<u>よ</u>」
(37) A「君、本当に料理なんてできるの？」
B「できるよ。黙って待ってろ」
(38) A「忙しいところを悪いんだけど、この書類、コピーしてきてくれない？」
B「いいです｛<u>よ</u>／*φ｝」
(39) A「無理を言ってるのはわかってるんだけど、手伝ってもらいたいんだ」
B「いい｛<u>よ</u>／*φ｝。協力しよう。」

上のように、日本語記述文法会は「情報の伝達」機能のほかに、「皮肉」などのような派生的な機能までも考察している。しかし、ヨの用法の基本的なものと派生的なものの分類ははっきりしていないと思われる。そのため、以下、日本語記述文法会の分析に従い、A：話し手 S と聞き手 H の情報構造、B：ヨの働き方、という２点から、同書の挙げる例を再び検討し、ヨの意味・機能を把握していきたい。

まず、(30)（31）は「注意を促す」という機能である。その構造は話し手が持っていて聞き手が持ち得ない情報の構造、つまり、A「話し手絶対優位の S＞H 情報構造」がある。それは、「注意を促す」という形において最も顕著に現われる。「切符が落ちました」「赤信号だ」ということは、聞き手が知り得ない（あるいは聞き手が注意していない）情報である。聞き手が知らない情報を与えるからこそ、話し手が聞き手に注意することができる。この用法は、ヨがないと不自然である。B「ヨは相手に「気づき」を求めるために使われ、聞き手への働きかけの開始を担う重要なコミュニケーション機能」を果たしていると言える。

次に、(32）と（33）は「説明を行う」という機能で、ヨの用法中に、「聞き手の知らない情報を伝える」という機能は最も無標なものだろう。「実家がこの近所である」ことや「入りきらない本があふれている」ことは、聞き手の知らない情報である。これは、A「情報量における S＞H の構造」である。しかし、「聞き手の知らない情報を説明する」という機能は「のだ」も持っているので、ヨはあってもなくてもよいのである。この場合のヨは、B「情報が聞き手に向けられていることのマーカー」で、やはりコミュニケーション機能を果たしている。

そして、聞き手が知り得る情報でも、聞き手の認識が話者ほど強くない場合、

話者はイライラして聞き手にそのことを再認識させようとする。例えば、「少しは将来のことを考えているの。君はもう二十歳だよ。」などで、機能は「聞き手に対する非難や皮肉」であり、先の例と（34）、（35）はその例である。「もう 2 時だ」「こんなスピートで突っ込んでくるなんて、自殺行為だ」は、聞き手の知り得る情報であるが、情報についての認識が足りないので、話し手が再認識を促しているのである。「ある情報に対する再認識を促す」というのは、往々にして「.聞き手の無知・認識不足に対する非難や皮肉・警告」につながる。だから、この用法は明らかに語用的なものである。これは、A「情報の認知度におけるS＞Hの構造」である。相手が知り得る情報を相手に向けるのであるから、このヨは「君はわかっているのか？」という嫌味になる。従って、このヨは言うなれば、B「情報が過剰に聞き手に向けられていることのマーカー」とでも言えよう。そのため、ヨの使い過ぎは聞き手に不快感を呼び起こすことにもなる。

さらに、話し手の情報を聞き手が疑っている場合は、話し手が反発や抗議などの反応を見せる場合がある（36、37）。これが、「聞き手に表わす感情を強める」である。これは、A「情報の確信度におけるS＞Hの構造」である。ただし、この例が不充分だと思われるのは、話し手の反応は（36）、（37）のような反発や抗議だけではないということである。例えば、「そんなにおかしい？」「（笑いながら）おかしいわよ。」などという場合は、抗議ではなく、話者の感情の強調である。抗議か感情の強調かは、あくまで文脈や場面によるものである。この用法の特徴は、聞き手の質問に対する答えであることが共通しているが、この場合のヨは、B「話者の主張を相手にぶつける機能」を持っていると言えよう。

最後に、（38）（39）は「相手からの依頼を受け入れる返答」の用法であり、A「話者優位の S＞H 情報構造」と、B「ヨのコミュニケーション機能」が統一的に示されたものであろう。聞き手の要求を話し手が受けるかどうかは分からない。だから、話者の方が聞き手より絶対的な情報優位に立っているし、返答は相手に向けたものでなければならない。だから、ヨは強制的に必要とされる。しかし、この場合に注意しなければならないことが 3 点ある。

I. 一つ目は、この場合のヨは「依頼を受け入れる返答」だけではなく、「提案」や「勧誘」を受け入れる返答の場合にも使われるということである。（もっとも、「提案」や「勧誘」を受け入れる返答の場合には、ヨだけでなくネも使われるが。）例えば次の例など。

（40）A「今夜みんなで一杯やりにいくんだけど、君もいっしょにどう？」
　　B「いいです｛よ／ね／*φ｝。」

II. 二つ目は、ヨを用いても下降調の時は φ と同じ拒否の意志になることで

ある。これは、「いいです」の多義からきている。

III. 三つ目は、依頼・提案・勧誘を受け入れる時にはヨをつけないと非文になるが、拒否する時にはヨはつけなくとも非文にならないことである。これらの対話の後には必ず聞き手の行為が伴うからである。依頼・勧誘・提案をする人は、依頼・勧誘・提案が相手の迷惑にならないか、相手に拒否されないかと心配している。承諾の返事は相手にとってプラスの内容の情報である。プラスの情報が相手に向けられたものであることを示すマーカーがヨなのである。また、「A：忙しいところを悪いんだけど、この書類、コピーしてきてくれない？」に対して「B：:いいです。」だけだったら、Bは「私はこの人の要求どおりコピーする必要がある」と自分で勝手に判断し、勝手にコピーをしに行くことになり、Aの要求に従ってコピーすることにはならないだろう。Aも取り付く島がなく、Bがコピーしている間に気まずい思いをするのではないだろうか。従って、「いいです<u>よ</u>。」と、ヨを使うことによって「相手の心理的負担を減少する」という機能が感じられる。一方、拒否の返事をする場合は、Bはコピーをしないのであるから、「Bがコピーしている間にAが気まずい思いをする」ということもないので、あえてヨを使わなくてもいいのである。つまり、「A：忙しいところを悪いんだけど、この書類、コピーしてきてくれない？」に対して「B：だめです<u>φ</u>。忙しいから。」と言ってもいっこうかまわないのである。拒否の返事は相手にとってマイナスの内容の情報であるから、それをあえて相手に向けるマーカーを使う必要はないということである。

以上、この場合の情報構造は、A「行為意志のS＞H構造」、ヨの役割は、B「話し手の行為意志が聞き手に向けられたものであることを示すこと」にある。整理すると次の表のようになる。

國立政治大學 National Chengchi University

表 12　ヨの用法

情報性質	ヨの用法	A：情報の S＞H 構造	B：ヨの機能
量的側面	注意を促す	S の情報量の絶対的優位	情報が聞き手目当てでしかないことのマーカー
	説明を行う	S の情報量の相対的優位	情報が聞き手目当てであることのマーカー
（中間）	相手からの依頼（など）を受け入れる返答	S の行為意志の絶対的優位	話し手の行為意志が聞き手目当てであることのマーカー
質的側面	聞き手に対する非難や皮肉	S の情報認知度の優位	情報が聞き手目当てであることの過剰なマーカー
	聞き手に対する感情の強調	S の情報確信度の優位	話し手の主張を聞き手にぶつけるマーカー

情報の特徴の面を考えると、「注意を促す」と「説明を行う」は情報の量的な側面の操作であり、「聞き手に対する非難や皮肉」と「聞き手に対する感情の強調」は情報の質的な側面の操作である。そして、「相手からの依頼（など）を受け入れる返答」の用法は、情報の量的なことを表わすだけでなく、語用的な表現も含んでいるので、量的と質的との中間の位置に分類されると思われる。従って、これからこの五つの用法を用いて分析していきたい。

3.2.3　ダロウヨについて

前節ではヨについて考察してきたが、その用法は五つ挙げられる。それぞれは①注意を促す、②説明を行う、③相手からの依頼（など）を受け入れる返答、④聞き手に対する非難や皮肉、⑤聞き手に対する感情の強調、である。この節ではダロウがこれらのヨと共起できるかどうかを考察していきたい。まず、例を見てみよう。

（41）女子大卒だというお前さんの腕の見せどころだろうよ。ないてたらご飯を口に入れてくれる人はいないんだよ。　（『声をください』）

（42）「えっ！どうして左へ曲がるんだよ。小松駅は突きあたりだろうよ。」（『雪の積む里』）

まず、例（41）と（42）は、聞き手が知らない情報、或いは気づかないことを与えることで、明らかに「注意を促す」のヨである。ここのダロウは、推量というより、むしろ自分の意見や認識を婉曲的な形で相手に述べる、という解

釈の方がよかろう。この場合のダロウは、断定のダと置き換えても、情報伝達ではあまり変わらないといえよう。

(43) 女：サリーは牛や羊や鶏、馬を飼っていて、ジャガイモがいっぱいの畑　　と、リンゴの木も何本かあるって言っているわ。子どもたちは大喜びね。
男：子どもたちは農場に行ったことがないからね。いろいろな経験ができるだろうよ。　　(『究極の英語リスニング』)

(44) 「私なんだか恥ずかしいの。金曜にお見えになる旦那さんのお客様、私を旦那さんに相応しいと見てくださるかどうか、それが心配で」と、杉子は真面目な顔をして言った。
「それは大丈夫、きっと彼は君とあって驚くことだろうよ。」　　(『蜩』)

次に、(43)(44)は事柄に対して聞き手より話し手の方がよく認識しているという例で、ヨの「説明を行う」用法である。前接の文は話し手が事柄に対して自分の推測を下ろしたものである。さらに、推測を表わす副詞「きっと」と共起している点から見て、この時のダロウは推量機能を持つことが分かる。

(29) どうせキミらには分からないだろうよ。トラの存在を信じ、怖がったところを笑い飛ばされ、なにこいつびびってんのとトケラウ人に侮辱された者の気持ちなんて分からないだろうよ。

(45) 「戦争中だし、政府が禁止した職業だ。仕方ないさ。君の係は随分君を大切にしてくれているじゃないか。君は五人中一番良い係に配属されて満足だろうよ！　　(『職は人生の天王山』)

(46) おれにもわからん。ナチスのことだ。どうせおれたちを強制労働にかり立てるんだろうよ。　　(『紐育、宜候』)

そして、例(45)におけるヨは、「皮肉」を表わすものである。例(45)、(46)と最初に挙げた(29)では、ヨの前接するダロウは例(43)(44)と同じく推量の機能を表わすが、ヨの機能は異なっている。例(43)(44)は、話し手が聞き手の未知の情報を伝えるという文であるのに対して、(29)や(45)、(46)の文は、聞き手の既知の情報であるが、話し手が再認識を促す、ということを表わすものである。従って、そのヨは「皮肉」の機能と認められる。それは、(29)と(46)に見るように、「自嘲・他嘲」を表す陳述副詞「どうせ」と共起しやすいことからもわかる。

國立政治大學 National Chengchi University

3.3　ダロウガ

3.3.1　ガの終助詞的な用法について

従来の研究では、助詞ガが主に格助詞や接続助詞としての機能が注目された。しかし、助詞ガは終助詞的な機能も持っている。

(47)「違うってんだよ。この馬鹿やろう。もののたとえで言ってるんだろうが。この時間だと、太陽の出てる方向が南ってくらい分かるんだよぅ」　(『漫才師の卵のタマゴ』)

終助詞ガと接続助詞ガは、統語的位置や機能、意味用法では、多少似通っているところがあると感じられる。また、接続助詞の文末用法はガだけでなく、タラやカラなども観察できる。多くの先行研究（白川（1995)、内田（2001)、本多（2001)、ヘイズ・新里（2001））ではこれを「接続助詞から終助詞への転化現象」と指摘している。その考えに従えば、ガの終助詞的な用法を把握するために、接続助詞を検討する必要もあると思われる。そこで、本節では終助詞ガがどのように接続助詞から転化するかを検討し、さらに終助詞ガの意味用法を明らかにしていきたいと思う。なお、接続助詞ガとケド[7]は機能や意味が厳密に言えば少し違うところがあるが[8]、基本義においては似通っているので、当面本節では同じものと扱うことにしておく。

3.3.2　先行研究

3.3.2.1　岩澤（1985）

岩澤（1985）では、主としてシカシ、デモなどの逆接関係を示す接続詞について考察してくる。岩澤は論理学の考え方に基づいて、逆接を「A である。A でない」という形と定義している。そして、実例を通して、逆接型接続詞には、逆接のほかに、対比、展開、転換、補足などの用法があると指摘している。それぞれの用法は次のようにまとめられる。

表 13　逆接型接続詞の用法と交換可能の接続詞

逆接型接続詞の用法	交換可能の接続詞
対比	一方、他方、それに対し
展開	また、そして、さらに
転換	さて、ところで
補足	ただし、ただ、もっとも

[7] ケドはケレドモの簡略形であり、そのほかにケレド、ケドモがある。ここでは口語で最もよく使われるケドを無標の形として四つの形の代表とする

[8] 例えば、ケドは主に口語で用いられるが、「が」は文語で用いられる。そして、非難のダロウガのガをケドと交換して「ダロウケド」と言うことはできない。

これらの用法では、対比用法はAと否Aの対立を強調するものである、と思われている。そして、展開用法から、逆接関係が曖昧化されるについて、転換や補足の用法まで、だんだん逆接性が喪失してくる。

確かに実例を通して、以上に指摘したような用法が見られる。しかし、岩澤は接続詞について考察しているが、逆接を表わす接続助詞に適するかどうかは、言い切れないと思われる。

3.3.2.2　石黒（1999）

石黒（1999）では、逆接について考察し、逆接に、前提の存在、反証性、後件比重性、理由要求性、といった基本的性格があると指摘している。まとめると次のようになる。

表 14　逆接の基本的性格

前提の存在	逆接を理解する際には必ず前提を意識する。また、前件と後件の関係によって因果関係と並列関係に分けられる。
反証性	逆接は前提となっている前件－後件関係の反証として提示される具体的表現である。その意味では前提の間接的否定と言える。そして、逆接を理解する際には、前件がもとになって後件が導き出されるという推論過程を伴う。
後件比重性	推論過程を伴うかどうかが逆接と逆接でない対比とを分けるポイントであり、推論過程を伴うことによって、前件よりも後件に表現としての重点が置かれている印象、つまり後件比重性が生まれる。
理由要求性	逆接は、前提という一般性の高い関係を否定することから生じる抵抗感を和らげ、表現としての安定性を確保するために原則としてその前後に理由が必要とする。

また、石黒は表現価値という観点から見て、逆接の表現価値を生み出す性質を、意外性、対比性、前件提示性、理由導入性の四つに分けている。

以上のように、石黒は逆接の性格について全般的に考察しているが、接続の用法から終助詞的用法への変化過程には触れていない。

3.3.2.3　日本語文型辞典（1998）

『日本語文型辞典』によると、接続助詞ガに下のような表現が挙げられ、それぞれ、逆接（48）と（49）、前置き（50）、言いよどみ（51）、という三つの用法に分類されている。（下線筆者）

（48）彼は<u>学生だが</u>、私は社会人だ。

（49）今日の試合は、がんばったが負けてしまった。
（50）先日お願いいたしました件ですが、引き受けていただくことはできませんでしょうか。
（51）すみません、ちょっとお先に失礼させていただきたいんですが。

しかし、上のような分類はやや不適切なところがあると思われる。例（48）と例（49）は前半と後半の内容が対立していたり、前半のことから予想される結果と反対のことが後半に述べられていたりする[9]。『日本語文型辞典』によると、（48）と（49）は同じく「逆接」に分類される。しかし、両者はテ形を使って言い換えるとその差異がはっきりする。

（48’）彼は学生で、私は社会人だ。
（49’）*今日の試合は、がんばって負けてしまった。

なぜなら、（48’）はただ前件と後件は対比的に並べて示されている[10]だけなので、テ形に置き換えても意味もほぼ同じであるのに対して、（49’）は前半と後半の内容が原因－結果の関係になっているので、むしろ「逆接」のプロトタイプ的な用法と思われるからである。それ故、（49）は「逆接」であるが、（48）のような用法は「対比」に分類したほうがよかろう。また、（51）のような表現は、文末に付けて言語化しないまま言いたいことを仄めかしているので、「言いよどみ」と名づけられるのだが、この場合、ガの節は「事情説明」となる。
以下で先行研究を踏まえて、また『日本語文型辞典』の分類に従って接続助詞ガを検討したいと思う。

3.3.2.1　接続助詞ガの基本用法と終助詞的な用法への拡張

A. 対比と逆接

接続助詞のガの用法には、階層性があると思われる。先の『日本語文型辞典』の例（48）と（49）を見てみよう。

（48）彼は学生だが、私は社会人だ。
（49）今日の試合は、がんばったが負けてしまった。

（48）の例は、文脈によって「対比」とも「逆接」とも取れる。単に二人の職業を比較する場合なら、例（48）は「対比」になるが、もし「若いですね。あなたたちは学生さんですか。」という問に対する答えとしては、例（48）は逆接と解釈できる。

[9] 『日本語文型辞典』p68－69
[10] 庵功雄等（2000）

また、「対比」は必ず主語が違うが、「逆接」は主語が同じ場合も違う場合もある。例えば、(49) である。構文上は「対比」と「逆接」は違うが、意味では、前件と後件の意味は対立的な関係になっている。よって、「逆接」は広義の「対比」の一種と言えよう。

図 7　対比と逆接の関係

対比（前件と後件の主語が違う）→逆接にもなる └→前件と後件の主語が同じ場合もある

「逆接」と「対比」は前件と後件の内容が一見平等に扱われているが、興味深いことに両者が位置を交替されると、ニュアンスがだいぶ違うようになる。

(52)　このおかしはおいしいですが、高いです。
(52')　このおかしは高いですが、おいしいです。

上の例はどちらもおかしについて説明している文であるが、比較してみると、(51) はおかしの値段に注目しているのに対して、(52') はおかしの味に目を向けている、と感じられる。では、「対比」の場合はどうだろうか。

(53) タンさんにはプレゼントをあげましたが、カンさんにはあげませんでした。
(53') タンさんにはプレゼントをあげませんでしたが、カンさんにはあげました。

上の例は、前件と後件を交代してもあまり差がないようであるが、下のように場面を加えてみればその差異がはっきりわかる。

(54) A：二人にプレゼントをあげましたか。
B：タンさんにはプレゼントをあげましたが、カンさんにはあげませんでした。
B：??カンさんにはプレゼントをあげませんでしたが、タンさんにはあげました。

何故前件と後件を交代するとニュアンスの違いが出てくるのだろうか。それは伝えられる情報の量から見れば、前件と後件いずれも等しい量を持っていると思われるが、情報価値上は等価ではないのである。確かに二つの文に分けると、それぞれ独立の文と認められる。しかし、接続助詞ガを用いて一つの文に

國立政治大學 National Chengchi University

なすとき、ガによって一種の比較が行われ、前件の文／節がただ比較の基準として提示され、後件こそ発話者が強調したい部分となる。(54) の状況で説明すれば、A の質問から分かるのは、B がプレゼントをあげたことである。それ故、B にとってプレゼントをあげたことより、あげなかったことのほうが情報価値があると思われるので、後件として発話されるのである。これはまさに石黒の挙げた「後件比重性」という逆接の性格に合致すると思われる。従って、「対比」と「逆接」は「後件情報重視」の情報構造になっていると思われる。

B. 前置き

次に、「前置き」を見てみよう。

(55) このあいだお願いした件なんですが、あれ、引き受けていただけますか。

(56) A：日本は物価が高いですからね。
B：私は去年日本へ行ったんですが、それほど高いとも思いませんでしたよ。

「前置き」とは、本題・本論に入る前に関連のあることなどを述べることをいう。実例としては、(55) (56) のように話題の提示や話題の展開の前提ということである。いずれも前件が後件の主張の前提となっているが、もしこの「前置き」がなくなると、

(55') あれ、引き受けていただけますか。

(56') A：日本は物価が高いですからね。
B：それほど高いとも思いませんでしたよ。

(55') では聞き手は心の準備ができていないのですぐ話題にはついていけず、(56') はいきなり話題が変わったという唐突感を聞き手に与えるであろう。この「前置き」の用法が定式化したものが、

(57) もしもし、田中ですが。

という電話における「名乗り」である。電話では顔が見えないので、前置きとして「名乗り」をすることが会話を始める前提になるからである。

C. 事情説明

下のように「前置き」と似通っている表現もある。

國立政治大學 National Chengchi University

(58) あのー、テレビの音がちょっと大きいんですけど…。
(59) 先生、ちょっと頭が痛いんですが…。

一見後件の内容がない文であるが、実はその後件は文脈から回復できる。(58) は「小さくしてもらえませんか」、(59) は「帰ってもいいですか」などが隠されていると思われる。これは、ガ・ケドの節で自分に関する状況を前提として説明し、本当の目的は後件の相手への依頼や訴えを仄めかす、という用法である。後件の内容に依頼や要求などのことが多く来るので、「前置き」と区別して「事情説明」と呼ぶことにする。

また、後件の内容をはっきり言語化しないで、わざと相手に思い出させるということも「事情説明」の特徴の一つである。

D. 問い返し

「事情説明」と同じく、次の「問い返し」の用法は、後件が省略されるが、目的は相手に後件の内容を自ら予想させるということである。これは「問い返し」というディスコースの中で発生することなので、会話文に限られた用法となり、従ってガでなくケドが多用される。

(60) A：あれっ、どこへ行くんですか？
B：え？家へ帰るんですけど　↑　（どうしてそんなことを聞くんですか？）
(61) A：いいマフラーね。どうしたの？
B：彼のプレゼントだけど　↑[11]（だから何なの？）

(60)ではBはAがなぜそんなことを聞くのかいぶかっており、(61)ではBはAの質問をうっとうしく感じている。これは、ケドの中に後件の意図を含ませることによって、後件を敢えて発話せずにすんでいるのである。

興味深いことに、この用法が「相手の問いの前提を問い返す」という含みを持つ時は、イントネーションは上昇調である。もしイントネーションが下降調に置き換えると、後の「言いさし」の用法になってしまう。

E. 言いさし

今まで触れてきた用法では、いずれも「後件情報重視」と関わっている。しかし、「言いさし」用法は後件を持っていない。「言いさし」とは、形式上で主

[11] (29) と (30) が同じく、インドネーションが上昇調の場合は、「そんなことを聞くな」という反抗のニュアンスがあるのに対し、平板調の場合は「私の行為に問題があるの？」という不安を表す。

節を伴わずに従属節のにで表現される[12]用法をいう。 下の例は、ガ・ケドによって「相手の反応を見る」という言いさし用法がされているものである。

(62) A：あの人、結婚してるかしら。
　　B：さあ、私は独身だと思うけど。

Bの発話のガ・ケドの後件を復元するのは不可能である。さらに、ガ・ケドが付けることによって、相手がどのように受け止めるか、話し手が気にしている、という含みが覗える。それは、ガを付けた文と付けない文を比較すればよく分かる。

(63) a.それじゃ、私、帰る。
　　b.それじゃ、私、帰るけど。

(63)aはただ意志の宣告をしているに過ぎないのに対して、(63)bは聞き手の反応を期待するニュアンスが感じられる。

なお、後件が表出されないという特徴から考えて、「言いさし」は接続助詞としての機能が薄れ、終助詞的な用法に移りつつある段階と考えられよう。

F. 非難

最後に非難を表わすガである。この用法はケドは使えず、ガに限られる。例（47）に戻ってみよう。

(47)「この馬鹿やろう。もののたとえで言ってるんだろうが。」

これはガで終わる文であるが、「言いさし」の表現と同じく、後に文が存在しない。だが、なぜガに非難のニュアンスが出てくるのだろうか。上の表現には、元々「おまえはなぜわからないのか」などの後件があるはずであり、その内容は相手を責めることである。はっきり言うより、言わないほうがニュアンスを強める修辞効果があると思われるので、後件がだんだん後退して、終助詞に移り変わったのであろう。

考察した結果をまとめてみると、下の表になる。

[12] 白川（2009）pp7

表 15　ガの用法

品詞の変化	用法＼後件	後件情報重視	後件省略	後件脱落
接続助詞	対　　比	●	×	×
↓	逆　　接	●	×	×
↓	前 置 き	●	△[13]	×
↓	事情説明	●	×	×
終助詞的	問い返し	○	●	×
↓	言いさし	○	○	●
終 助 詞	非　　難	（派生的意味重視）		
●：プロファイルされている　○：脱色されている ×：不可　△：場合によって可能				

表の記号については、文の中で重点をどこに置くか、つまりプロファイルされているところは、黒丸（●）で示す。それに対して、二つ以上の特徴を持っている場合、例えば問い返しや言いさしなどは、主要な特徴をプロファイルして、ほかの特徴が脱色されているということを丸（○）で示す。

3.3.2.2　情報の量的関係と質的関係

前節では接続助詞ガの各用法について紹介し、さらに接続助詞から終助詞への転化を考察してきた。結果として言えば、各用法の間には、後件部重視ということが共通していると思われる。ここでは、伝達される情報の性質から各用法をみて、その異同を把握しようと思う。

前節で掲げたように、「対比」と「逆接」は、それぞれ接続助詞ガの各用法では、「後件部重視」ということが共通していることが分かった。しかし、同じ「後件部重視」であるが、重視する点がやや異なっている。まず、「対比」と「逆接」の用法では、ガと接続する文は、前件と後件の情報の量が同じであるが、情報の価値[14]が違っている。しかし、それに対して、「前置き」と「事情説明」は同じく情報の価値ということでは説明しにくいようである。「前置き」と「事情説明」はある話題の展開の前提として発話される用法であるから、前件あるいは後件だけで発話すれば、情報が足りないという感じが与えられる。それ故、前件と後件は情報の価値ではなく、情報の量的関係になっていると考えられる。

また、「問い返し」の場合、聞き手が後件を予測させるために、後件を省略するのである。こう考えれば、やはり前件と後件の情報は量的な関係になっているのではないだろうか。なお、「言いさし」と「非難」には後件をはっきり

[13] 例えば、電話の遣り取りなどのような慣用表現では、「逆接」の後件が省略可能と思われる。
[14] より明確に言えば、発話者の判断での重要さである。

言語化されていない場合が多いので、情報性質の比較をしにくい。以上の考察をまとめると、下の表になる。

表 16　ガにおける前件と後件の情報関係

用法	前件	後件	前件と後件の情報関係
対　　比	A±	B∓	質的 （価値）
逆　　接			
前 置 き	a	a＋A	量的
事情説明			
問い返し	a	(a＋A)	量的

「対比」と「逆接」では前件と後件の情報が質的に異なっていて、さらに前件と後件の重要度が等しいため大文字「A」と「B」で、質的な差異はプラス・マイナスで表示する。一方、「前置き」などでは前件と後件の情報が量的に異なっているので、前件を小文字「a」で、補足する情報としての後件を大文字「A」で表わす。また、「問い返し」は後件が省略されることがあるので、括弧を付ける。

3.3.3　ダロウガについて

本節では、ダロウと終助詞ガとの共起について検討したい。前節で既に終助詞ガの由来について考察したが、その意味は「相手を非難する」ということであった。では、なぜダロウガという形式で現れるのだろうか。

(64) 金沢の子分の男が、夜間窓口の所に立っている。拳銃をチラつかせて、
「調べりゃ分るだろうが」と、少し苛立っている。
「救急の方は明日でないとここへ回って来ないんです」と、窓口の看護婦が答えていた。
「そこを調べてくれと言ってるんだ。――こっちもそうのんびりしちゃいられねえんだよ」男が凄む。　　（『おとなりも名探偵』）

(65) 幹子は廊下へ出ると、電話をかけた。めったに回すことのない番号だ。
「わしだ」
神永がすぐに出た。「かかって来ると思っとったよ」
「とんでもないことになりました」
「うん。一体どうなっとるんだ？」
「私にも見当がつきません。ただの発作と見えるように始末して来たのです。それなのに……」
「妙な話だな。それにまずいことに、依頼人が容疑をかけられている」
「でもあの人は同窓会へ出ていたはずです。アリバイがあるでしょう」

「それならいいが……。もし訊問されて、われわれのことを洩らしでもしたら……」
「ええ、よく分ります」
「君も分っとるだろうが、この始末は――」
「はい。私が必ず。万一、私が失敗したら、決りどおりに処置して下さい」　（『さびしがり屋の死体』）

（64）は男が看護婦の行動に不満を表す場面で、（65）は神永が事態の厳重さについて幹子に注意することである。上の例はいずれも、話し手と聞き手の認識の間にずれがあって、不満や非難の意味が生み出されたからである。比較として、（35’）と（36’）には非難の意味があまり感じられない。

（64’）「調べりゃ分るだろう」
（65’）「分かっとるだろう」

そうすると、不満・非難のニュアンスはダロウガそのものから生じてくることが推測できよう。また、単にダロウだけの場合、話し手がある事態に対しての認識や考えを相手に同意させる、ということで、明らかにダロウは「確認要求」の機能を果たしている。すなわち、（64’）と（65’）の場合は相手に事実を突きつけていて確認要求してもらう、ということであるのに対して、（64）と（65）は確認要求をしている事実を相手が理解していなく、相手に突きつけた事実が突き返されたことの苛立ち、ということが感じ取られる。

さて、「相手に突きつけた事実が突き返されたことの苛立ち」は、相手に突きつけたい事実と現実の結果が逆接の関係になっていることからきているのだろう。よって、終助詞的用法のガは、逆接の接続助詞ガの母斑を残していると言えよう[15]。

このように、ガが非難の機能を持つのは、ダロウの確認要求の機能と結びついているからなのである。

[15] 人を罵倒する「が」には、「だろう」を伴わない「あのバカが！」のような例もある。この「が」は、名詞句につくことからもわかるように、格助詞の用法の一種かと思われる。格助詞の「が」は、現存文の主語などに付く「中立・主格のガ」と、主格名詞を取り立てる「排他・特立のガ」があるが、「あのバカが！」の「が」は「排他・特立」の用法ではないかと思われる。これについては、本稿の課題である「だろう」とは関係がないので、深く論じない。

3.4　ダロウニ

ニは格助詞として認識されているが、ダロウと組み合わさると接続助詞と終助詞の用法も出てくると見られる。例えば、次の例である。

(66) 忙しくて大変だっただろうに、よく期日までに仕上げたものだ。
(『日本語文型辞典』)

(67) うちでグズグズしていなかったら、今頃は旅館に到着しておいしい晩ご飯を食べていただろうに。　(『日本語文型辞典』)

『日本語文型辞典』では、(66) におけるダロウニは「「と思われるのに」という意味で、話し手の同情、批判などが込められることが多い」とされている。(67) は、「実際には起こらなかったことを残念に思う気持ちを表わす」ということである。以上は意味から分類したのであるが、例文から観察すると、ダロウニの現れる位置はほとんど文末、あるいは複文における前件の末である。つまり統語機能では、ダロウニが終助詞ないしは接続助詞の働きを担っていることがわかる。そして、ダロウはもともと文末に置かれる、蓋然性をあらわすモダリティであり、接続助詞的用法を有し得ない。従って、ダロウニにおいて終助詞的な用法か接続助詞的な用法かの決め手は、ニであると推測できよう。問題はなぜダロウニの形式で現れるのか、または接続助詞用法と終助詞用法がどんな関連があるか、ということである。以下はニの本来の性格を考察することを通して、ダロウニについて分析していきたい。

3.4.1　ニとノニの位置づけ

大辞林によれば、ニは文語の接続助詞で、逆接の条件を表している。現代日本語では、逆接を表す接続助詞として使われているノニの原型は、接続助詞ニの前に準体助詞ノが挿入されてできたものと考えられている。例えば、

(68) 庭の面はまだ乾かぬに、夕立の空さりげなくすめる月かな。
(69) 呼んで居るのに、返事もしない。　(山田 1936pp：539)

そしてニについて、山田 (1936) では次のように述べている。

「に」は亦前後の事実を綜合するに用ゐるものにして連体形につくなり。これも亦従来齟齬(そご)を示すものといはれたるものなれどその然らざることは「が」におなじ。(中略) 口語にては上の「に」より出でたる「のに」あり。これはその「の」をば上の句を受けて体言の資格を與ふる為に加へたるもの

が自然に下の助詞と合体して一の助詞の如くなれるなり。

従って、ニとノニはいずれも接続助詞とされており、意味でも統語的機能でも全く一様であると言えよう。

3.4.2　ニ・ノニについて

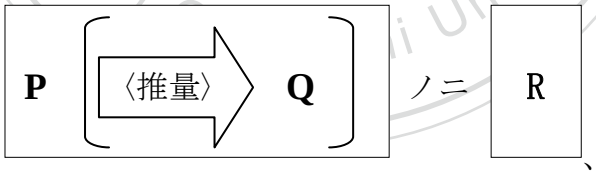
3.4.2.1　ニ・ノニの基本的意味

前節でニとノニについて考察した。現代語の接続助詞ノニは古語の接続助詞ニと関連していると思われる。しかし、本論は共時的研究であるため、便宜上で接続助詞ニとノニを同じものに扱うことにする。さて、ノニの基本的意味を見てみよう。渡部（1995）ではノニについて、その枠組みを論理構造（P{ノニ}、R）で示し、次のように述べている。

> P から Q が予想／期待される｛のに｝、実際に R である。（中略）
> ノニは、すでに現実した事態 R（ないしは実現が確実な事態 R）に対して、話し手にとって望ましい、期待されるべき事態 Q との相違を指摘し、遺憾、受け入れ難さを示す形式。

上述によれば、Q は話し手が事態 P から推論して得たものであり、成立した事態 R と話し手の想定する Q とは反対の結果になる、と考えられる。ただし、渡部は実際の発話では Q が発話されることは少ない、とも指摘している。ここで渡部の論述を図示してみると、下のようになる。

図 8　ノニの論理構造



上のように、前件の内部で話し手の推測過程が行われるが、推測結果があまり表に出現していない。そして、前件が後件と対照して、両者において逆接の関係になっていることが分かる。

また、前田（1995）では、ノニ文における主節のモダリティの制約について、主節の事態は必ず実現した事態に限っている、と指摘している。なぜならば、後件が実現した事態でなければ、予測してきた前件と比較する基準がなくなって、食い違うからである。それ故、ノニの主節には、意志・願望、命令・禁止、疑問、推量などの表現が出てこない[16]。

[16] ただし、前田（1995）では例外もあると述べている。たとえば、ノダの疑問文や禁止文場合である。

以上をまとめてみると、ノニは以下のようないくつの特徴を持っていると言えよう。

①ノニは前件と後件の食い違いを表すと同時に、話者の遺憾や驚きなどの気持ちが含まれている。

②ノニにおける前件は話し手自身の予測・推量したものであるが、その予測・推量した結果は通常文中・会話に出てこない。

③後件はすでに実現した事態、あるいは事実的に扱われている事態に限っている。

3.4.2.2　ノニの用法

A.文中

次にノニの用法を見てみよう。『日本語文型辞典』では、ノニを文中の用法と文末の用法に分けている。さらに文中の用法を、A.原因、B.対比、C.予想外という三種類に分類している。

ノニはそもそも前件と後件が因果関係になっている論理文の一種と思われるが、ケドと異なって、話者の遺憾などの感情を帯びている。このような論理的な逆接と発話のニュアンスははっきり分けられないので、上の分類のように「原因」と「予想外」という分け方が適当とはいえないだろう。従って、より適切な分類が必要と思われる。以下は『日本語文型辞典』における例を検討しながら、ノニの機能を把握していきたい。

まず、「原因」と「予想外」の例を見てみよう。(『日本語文型辞典』の例)

(70) 5 月なのに真夏のように暑い。
(71) 家が近いのによく遅刻する。
(72) 雨が降っているのに出かけていった。
(73) 合格すると思っていたのに、不合格だった。
(74) 今晩中に電話するつもりだったのに、すっかり忘れてしまった。
(75) 和子さんには来てほしかったのに、来てくれなかった。

上例はそれぞれ (70) ～ (72) が「原因」に、(73) ～ (75) が「予想外」に属している。しかし、前述のように、逆接と発話のニュアンスがはっきり区別できないので、こういう分類には問題がある。例を観察してわかるのは、1

---

(28) お金がないのに高い本を買うのですか？
(30) まだ病気が治らないのに、無理をするな。
これらは文全体を疑問や禁止のスコープに含まれて事実的に扱われていると考えられる。
(28') [お金がないのに高い本を買う] のですか？
(30') [まだ病気が治らないのに、無理をする] な。
また、推量を表すダロウは用いられないが「だろうか」が可能なのは、この場合の「だろうか」は「反語」であり、話者の主張と扱われているからである。
(31) 薬を飲んだのに治らないだろうか。(＝きっと治る)　　(前田 1995：503-504)

～3 における前件は物事や自然についての叙述であるのに対して、(73) ～ (75) の場合は人の行動の叙述である。

その中では（70）～（72）類は誰が推測してもほとんど同じ結果のものである。例えば、(71）のような距離の推測では、通常近くに住んでいる人が、目的地に早く着くのは当然と考えられる。だが、結果はその予測に反しており、加えて発話に話者の気持ちも含まれている。この類は通例や自然現象などが多い。一方、(73）～（75）類はある人の行動や動作を予測して想定したものであるため、(70）～（72）類と違って、その予測が外れる可能性もある。それ故、ここで（70）～（72）類は「慣例予測の逆接」を、(73）～（75）類は「行動予測の逆接」と呼ぶことにする。

次に、「対比」の例である。

(76) 昨日はいい天気だったのに、今日は雨だ。
(77) あの中国人は日本語はあまり上手でないのに、英語はうまい。
(78) お兄さんはよく勉強するのに、弟は授業をよくサボる。

『日本語文型辞典』によれば、この用法は「けれども」や「が」で言いかえが可能であるが、違いはノニには話し手が感じている「おかしい、変だ」等のニュアンスを含むだけ、ということである。しかし、そうすると、下の例はなぜ不適切なのだろうか。

(79)　私は数学が得意｛？なのに／だけど｝私の友人は英語が得意だ。
（渡部 1995：558）

渡部によれば、(79）は単に事態間の対比であり、その中に因果関係が成り立ちにくいため、ノニが用いられにくいのである。そう考えると、(76) ～ (78) はノニと接続できる理由は、前件と後件が何らかの因果関係が存在していることが考えられる。例えば、(78）では、兄がよく勉強しているので、兄弟としての弟もきっと同じだろうと思った。だが、実際はそうではなく、「弟はよくサボる」という先の予測に反する結果になっており、さらに「兄と同じ勤勉さを弟にも期待していたのに、期待が外れてがっかりだ」という遺憾の感情も含まれている。従って、対比を表わすノニには、発話者の情意のみならず、前件と後件の間に存在している因果関係も必要である。

上の分析を通じて、ノニの文中の用法は以下のようにまとめられる

表 17　ノニの文中の用法

<table>
<tr><td>日本語文型辞典</td><td colspan="2">修正後</td></tr>
<tr><td rowspan="2">C. 予想外</td><td rowspan="2">①逆接</td><td>A. 慣例予測の逆接</td></tr>
<tr><td>B. 行動予測の逆接</td></tr>
<tr><td>A. 原因</td><td colspan="2">②論理矛盾[17]</td></tr>
<tr><td colspan="3">B. 対比</td></tr>
</table>

B.文末

次はノニにおける文末の用法である。ここで言う「文末の用法」とは、前件と後件を接続するのではなく、ノニと接続する文しか現れないことである。そして、その中に、後件が言語化されないで裏に含まれることや、最初から後件が存在していないことなど、段階的な連続関係にあると思われる。多くの先行研究で指摘したが、研究者によって使う用語も異なっている。本稿では、こういう接続助詞が文末に現れる用法を「終助詞的」な用法と称することにする。ただし、ノニが文末に現れることのすべてが終助詞的な用法といえるわけではない。例えば、下の例である。

(80) スピートを出すから事故を起こしたんだ。ゆっくり走れと言っておいたのに。　(『日本語文型辞典』)

上例は確かにノニが文末に現れている。しかし、全体を見ると、ただ前件と後件の位置を交換したに過ぎなく、2 つの文にはやはり逆接の関係がなることが分かる。これは終助詞的な用法ではなく、倒置である。このような倒置用法は、本稿では考察対象から外すことにする。

さて、以下は例をみながら、ノニの終助詞的な用法を観察していきたい。

(81) おかしい。いつもなら、午後三時には出かけるのに。　(『あなた』)

[17] 逆接の表現では、前件と後件の矛盾によって、「状況矛盾」と「論理矛盾」に分けられる。状況矛盾とは、状況によって前件と後件の間にある関連がある、ということである。例えば、

・(歌手のオーディション) あの人は顔がきれいだ {けど／*のに}、歌が下手だ。

上述の場合は歌手のオーディションであるため、外見だけでなく声もちゃんと要求されているのである。もし普通の場合では、その前件と後件は別に矛盾にならない。

一方、論理矛盾とは、前件から得られた認識が後件と食い違っていることである。例えば、

・あの店は高い {けど／のに}、まずい。

普通、人には、値段が高い店ならば、その料理はきっとおいしい、という予測がある。しかし、実際にその予測にならない、つまり考えと現実が食い違っている場合、矛盾が生じてくる。さらに、その矛盾はどんな場合でも成り立つものである。これは論理矛盾である。

逆接の形式においては、「のに」は論理矛盾だけに用いられるが、「けど」は状況矛盾にも論理矛盾にも用いられる。

(82) 久美が和田の肩をつかんで揺さぶる。「死なないで！まだ死んじゃだめよ！あなた——」
　すると、和田の顔の表情がピクピクと震えて、目が開き、
「——何だ」
と、かすれた声がした。「人が眠ってるのに」（『おとなりも名探偵』）

(83) 「じゃ、まあ今夜一晩、ともかく休ませて、明日の様子で検査してみましょう」
「はい」
「じゃ、何かあれば呼んで下さい」
　と、医師が出て行く。
「どうも……」
　と、久美は頭を下げていたが、ドアが閉ると、「——さあ、起して話を聞かなきゃ」
　夕里子は呆れて、
「薬で眠ってるのに？」
「そんなこと知らないわよ。ともかくこっちは訊きたいことがあるの」
（『おとなりも名探偵』）

先で考察したノニの接続用法の分類に当てはめてみると、(81) は「行動予測の逆接」に、(82 と (83) は「慣例予測の逆接」に属することがわかる。そして、意味ではいずれも前件と後件との食い違いによって、話し手がマイナスな心理状態が生じてくる。その食い違いを示すために、ここで三段論法を利用して、その推論構造を示したい。

図 9　(81) の推論構造

			＜現実 **R**＞
P	大前提：いつも午後三時に出かける	（食い違い） ←——→ 意外の気持ち	出かけていない
Q	小前提：今、午後 3 時である 結論　：出かける		

図 10　(82) の推論構造

			＜現実 **R**＞
P	大前提：眠っている人を起こすのは非常識なことである	（食い違い） ←——→ 不満	眠っている人を起こす
Q	小前提：眠っている人を起こす 結論　：非常識なことである。		

國立政治大學 National Chengchi University

図 11　（83）の推論構造

				＜現実 **R**＞
P	大前提：薬で眠っている人を起こすのは無理なことである	（食い違い）←→ 驚き		薬で眠っている人を起こす
Q	小前提：薬で眠っている人を起こす 結論　：無理なことである。			

上の構造を通じて、不満や残念の気持ちの生起は、実際の行動は大前提 P と正反対になっており、推論の結論も衝突するということによるものと分かる。しかし、なぜノニで文が言い終わるかというと、その後件が目の前の事実であるため、話し手がはっきり言わなくても聞き手がその言語化されていない意味を理解できると思われるからである。従って、「行動予測」にしても「慣例予測」にしても、後件は基本的に必要なものであり、終助詞的な用法とは言えないだろう。後件がない場合、それは後件の省略にされるのである。

しかし、同じく文末に出るし、「行動予測」や「慣例予測」をあらわすノニは、下のように仮定表現「ば」や「て も」などと共起する形もある。

(84) あと五秒早ければ始発電車に間に合ったのに。(『日本語文型辞典』)

(85) 「でも、河野君、あなたまで帰って来てるってのは、どういうこと？主人を一人で残して来るなんて」
「社長のご命令で」
「いくら『ご命令』でも、いつもなら言うこと聞かないでしょう。それが今回はどうして？」
「それは……」
河野の額に汗がにじんでいるのを見て、恵美もびっくりした。
「いいわ。分った。——言いたくなければいいわよ」
「奥様——」
「ごめんなさい。あなたに当っても仕方ないのにね。もう行って。会議の日程だけでも、何とか出すように主人に言ってちょうだいね」
(『あなた』)

(86) 畜生！二十四時間も待つのか。馬鹿らしい！一気に突っこんで勝負をつけちまえばいいのに。飛び込んで、狙いをつけて引金を引く。ほんの数秒で済むことだ。(『孤独な週末』)

(87) 「お前は明日帰るんだな」
「だって、約束があるのよ。前から分ってれば、断ったのに——」
(『あなた』)

(84) ～ (87) はいずれもノニが条件表現の「ば」や「て も」と共起するも

のである。その意味は、話し手が既に起きた事実に対して反対のことを仮定して、そして仮定したことの未実現のため、話し手が残念や不満の気持ちを生み出す、ということである。この表現は前のと異なり、その後件 R が存在していない。これは論理構造で示すと、はっきり見られる。

図 12　（84）の推論構造

			＜現実 **R**＞
P	大前提：もし五秒早ければ始発電車に間に合う	（食い違い） ←――――→ 残念な気持ち	始発電車に間に合わなかった
Q	小前提：もし電車に間に合うならば、待つ必要がない。 結論　：もし五秒早ければ、待つ必要がない。		

図 13　（87）の推論構造

			＜現実 **R**＞
P	大前提：もし前もって分かっていれば、約束をしない	（食い違い） ←――――→ 残念な気持ち	前もって分かっていないため、約束をした
Q	小前提：もし約束をしなければ、明日帰らなくてもいい。 結論　：前もって分かっていれば、明日帰らなくてもいい。		

前で述べたように、ノニの典型的な用法は、話し手が事態 P から推論して得た Q と、現実の事態 R と反対の結果になって、そして話し手が焦点をその相違に当てて残念や驚きなどの気持ちを表すものである。そこから見ると、事態 P、推論 Q と現実した R はいずれも必須な要素である。しかし、それに対して、ノニの終助詞的な用法における推論 Q は反現実の仮定であり、つまり必然にそうなるわけではないことである。その場合では話し手が推論 Q に焦点を当てて、推論の未実現に対して遺憾や不満の気持ちを表わす。そして、焦点を推論 Q に置くため、後件の事態 R の存在が希薄になって、言語化しないことにされているのではないだろうか。従って、その時のノニは終助詞的な働きを果たしていると言えよう。

以上の考察を通じて、ノニの用法は以下のようにまとめられる

國立政治大學 National Chengchi University

表 18　ノニの用法

<table>
<tr><th>位置</th><th>形式</th><th colspan="3">用法</th></tr>
<tr><td rowspan="3">文中
｜
｜
｜
｜
｜
文末</td><td>前件 P ノニ、後件 R</td><td>①逆接：
A.慣例予測の逆接
B.行動予測の逆接</td><td>②論理矛盾</td><td>③対比</td></tr>
<tr><td>前件 P ノニ。
（後件 R 省略）</td><td colspan="3">逆接：A.慣例予測の逆接
B.行動予測の逆接</td></tr>
<tr><td>前件 P ノニ。</td><td colspan="3">発話者の不満・残念などの気持ち</td></tr>
</table>

3.4.3　ダロウニの意味・機能

この節ではダロウとニとの共起について検討したい。前節ではニとノニとの関連について考察し、現代語のノニと古語のニの間に歴史的な推移があるが、現代ではノニしか使われなくなった、という結果が得られた。そしてノニには、接続助詞と終助詞的な用法があることがわかった。では、ノニ（／ニ）はダロウと共起するとき、どうなるのだろうか。まず形態から見てみよう。

前の考察ではダロウニにおけるニはノニに当たるものという結果が得られた。しかし、形式ではなぜダロウノニではなく、ダロウニという形態で使われているのだろうか。目的論的な面から考えれば、これは多分終止形と連体形を区別するために、準体言ノが挿入されたのだろう。なぜかというと、否定助動詞ズを例にしたら、古語では動詞の終止形と連体形は違った形態を持っているので、終止形はズで連体形はヌである。しかし、それに対して、現代語ではこういう終止形か連体形という形態上の区別がない。区別するためにニの前に準体助詞ノをつけて連体形であることを示したのではないだろうか。

そして、ダロウはデアロウの縮約形で、「体言＋デ＋アリ」（古語ではニアリまたはニテアリ）の、アリの未然形に推量の助動詞のムがついて「ニテアラム」になったものである。また、前接語も名詞か形容動詞に限られている。アラムがアランになり、アラウになり、アロウになったと考えられる。つまり、

表 19　ダロウの変化の過程

接続	形式	説明
体言＋	ニ／ニテアリ	原形
体言＋	ニ／ニテアラム	動詞アルの未然形アラ＋推量の助動詞ム
体言＋	ニ／ニテアラン	ムの鼻音化【（aramu → aram~~u~~ → aram）平安から鎌倉以後】

体言･文＋	デアラウ	①ニテがデに変化する。 ②アランの長音化【(aram → arau)、表記はアラウだが発音はアロウ。鎌倉時代以後～第二次世界大戦前で】
体言･文＋	デアロウ	（発音と表記の一致　arau → aroo　:第二次大戦後）
体言･文＋	ダロウ	デアロウの縮約化【(dearou → ~~de~~arou → darou）デアロウは書き言葉、ダロウは話し言葉と「棲み分け」がはっきりさせられる。】

このような変化の過程を経たものと思われる。従って、現代語ではダロウは「断定の助動詞ダの未然形ダロ＋推量の助動詞ウ」と分析されるが、このウは上記のことからまぎれもなく古語のムの異形態と思われる。ダロウという語は推量の助動詞ウ(古語ではム)を含むからモダリティと言われているのである。このようにダロウという語は語は多分に古語の痕跡を残した語であるため、古語の文法どおり、ノニでなくニがつけられるのではないだろうか。

ちなみに、文学作品やインターネットで実例を探せば、ダロウニの使用が圧倒的である[18]が、「だろうのに」という形態が使われることもある。

(88) お掃除は苦手だ。本当は、綺麗にできるところがいっぱいあるだろうのに、途中で嫌になる[19]。

これは多分ダロウの終止形と連体形が同じ形態であるので使用では揺れが生じてくるということなのではないだろうか。

次にダロウニの用法について検討する。

(89) 智弁和歌山を５安打に抑えて完投したエース新西貴利選手については、「疲れがたまっているだろうに、よく投げた。準々決勝も力を出し切って、自分たちが果たせなかった４強入りをしてほしい」と話した。（朝日新聞 2009 年 08 月 21 日 http://www2.asahi.com/koshien/91/miyazaki/news/SEB200908210013.html）

(90) かなりの蕎麦屋が機械を使っているだろうに、これほどの硬さに出会ったことはない。機械以外に何かあるに違いない。（朝日新聞 2009 年 3 月 31 日http://www.asahi.com/food/column/oyaji/TKY200903310160.html）

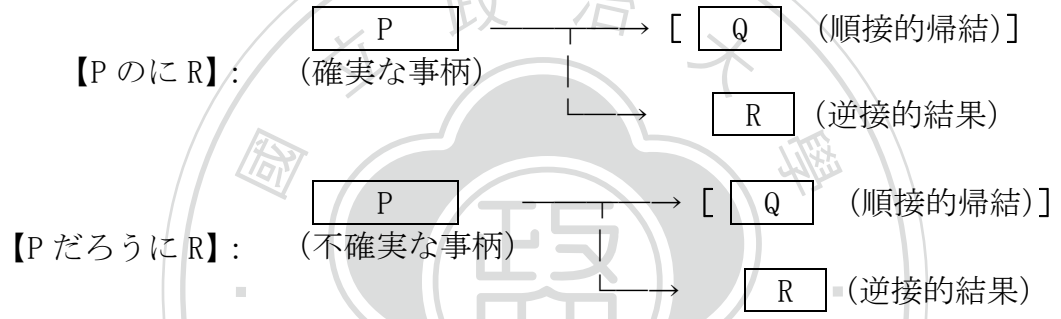
[18] グーグルで検索すれば、「だろうに」は約 16,900,000 件であるが、「だろうのに」は 1,270,000 件がある。青空文庫で検索すれば、「だろうに」は約 1,090 件があるが、「だろうのに」は約 360 件がある。

[19] ブログhttp://marron.nyaos.net/archives/2006/03_index.php?page=2　（2009.12.30 検索）

(91) スタッフ関係者からも「本人も疲れているだろうに、相手のことを先に思いやる姿にみんながひかれている」と称賛の声。（朝日新聞 2009 年 7 月 27 日http://www.asahi.com/showbiz/korea/TKY200907260094.html）

上記の例ではダロウニは文と文を接続する働きをしているので、明らかに接続助詞として使われている。そして前件のことから推量したことが、後件と食い違いになっていることは、ノニ／ニの「行動／慣例の逆接」用法であると思われる。だが、違いはノニ／ニにおいては、前件はある事実である。そして前件の事実を基づいて推量するのである。それに対してダロウニにおける前件は、話し手が確実できない事柄であるので、推量を表すダロウが用いられるのである。つまり、次のように表示できる。

図 14　ノニとダロウニの比較



以上はダロウニを接続助詞として使われる表現である。次に下の例を見てみよう。

(92) 佐伯を始め、もちろん君原も、全員が居間の床に座っているのである。
「あの……。ソファに座った方が楽ですよ」
と、分り切ったことを言うと、
「いいんだよ」
と、佐伯が肯いて、「何しろみんな汚れているからね。床は後で｜拭けばきれいになるが、ソファを汚しちゃそうはいかない。だから床に座ってるのさ」
お尻が痛いだろうに。大体、今までトラックに揺られて来たのだ。
亜紀は、佐伯たちの「礼儀」に感動した。　（『くちづけ　下』）

(93) ユリエがかかえている二缶のビールへ目をやって、「二人か」
「二人だけど、これは一人で飲むのよ」
何の話をしてるんだか……。缶ビールのこと以外にも、何か言うことはあるだろうに。　（『天使は神にあらず』）

一見（92）と（93）には後件がないとされるが、実際に省略されるに過ぎないと思われる。(92）の場合は「床に座った」で、(93）は「何も言わなかった」などのような後件が推定できよう。また、(89）～（93）と同じく、話し手が前件の事柄について発話態度が確信を持っていないので、ダロウという推量形式を使うのである。そしてニは前件と後件の相違を示すほかに、話し手の意外や疑惑などの気持ちも表している。

(94）「死体はどうせ見つかるんだ。それなのにどうして服だけ川へ捨てたんだろう？」
「知るもんか」
「川へ捨てるより、どこか山の中へ埋めれば見つからずに済むだろうに。川へ流したばかりに、いくつかは見つかっちまった」
「気が転倒してたのさ」
加賀見はあまり細かいことにはこだわらない男だった。
（『一日だけの殺し屋』）

(95）「終わりに行くにつれて良くなったぞ。初めからあの調子だったら、あまり文句も言わずにすんだろうにな」（『やさしい季節 上』）

（94）と（95）にはいずれも仮定とニの共起表現である。すなわち、起こった結果は話し手の想定した前件と相違するものである。この表現では後件が希薄になり、無関心に扱われることが多く、ダロウニ全体は終助詞的な用法になってくると考えられる。その時のダロウは推量の働きを担っていると思われる

まとめてみると、ダロウニは、発話者がある事柄について不確かな態度で扱う時に、ダロウの推量を用いて発話するのである。また、ニの働きの上で、ダロウニには接続助詞や終助詞的な用法がある。意味では前件と後件の相違によって話し手が不満・意外、愚痴を言うような意味を表している。特に終助詞的な用法のときに、その気持ちがはっきり感じられる。

3.5　ダロウネ、ダロウヨ、ダロウガ、ダロウニの比較

本節では、前節で得た結果を踏まえてダロウネ、ダロウヨ、ダロウガ、ダロウニ、四者の異同について考察していきたい。

考察に入る前に、ここで、山梨（2000）の＜参照点起動の推論モデル＞に簡単に触れていきたい。まず、例を見てみよう。

(96）静かにしたらどうなの？（山梨 2000：pp115）

上例は文型から見れば、疑問文であり、質問の意味がかかわっている。しかし、質問の意味は、依頼の意味を起動するための手がかりとして相対的に背景化されている。すなわち、表層的には疑問のタイプの文であるが、語用論的には依頼ないし命令の発話の力が関わっている。図示すれば、質問の意味を Mi、依頼の意味を Mj とすると、その解釈は図 15 のように示される。なお、I は解釈者（Interpreter）で、U は問題の発話（Utterance）、Mi と Mj は解釈のターゲットの意味である。Mi の細線と Mi の太線は、前者の意味が後者の意味に対して相対的に背景化されていることを示している。

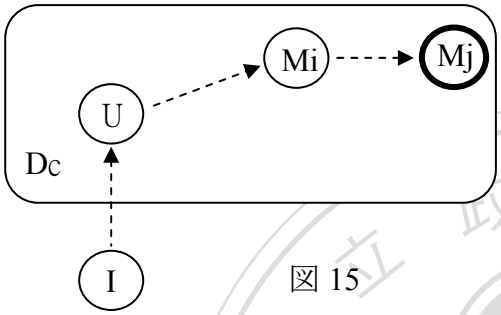


図 15

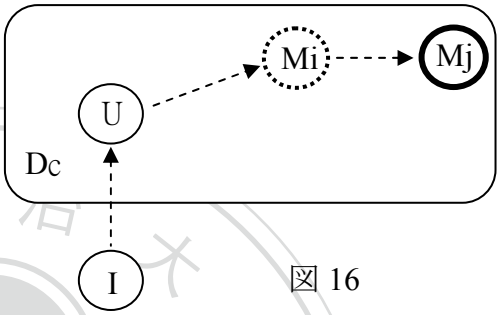


図 16

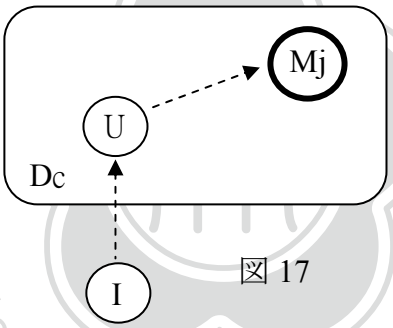


図 17

（山梨 2000 : pp115-116）

また、図 15 のような背景化が進んでいくなら、一次的な意味（Mi）は失われ、二次的な意味（Mj）が文字通りの慣用化された意味としてその表現に入り込んでいくことになる。上のように、図 15 から図 16 へと背景化のプロセスを進んでいくと図 17 になる。

前節で考察したように、ダロウが終助詞ネ、ヨ、ガ、ニと共起した場合は単に二つの意味が相加するわけではなく、両者の結合によって新しい意味が派生される。これはまさに山梨が挙げたプロセスと軌を一にしているといえよう。従って、以下は山梨（2000）で提示した＜参照点起動の推論モデル＞の概念を踏まえて、ダロウと各終助詞との共起関係について考察してみたい。

3.5.1　ダロウネ

3.5.1.1　推量同意と推量確認

ダロウネでは、推量を表すダロウが、「同意要求」を表すネと「確認」を表すネが重なって現れるので、二つのパターンに分けられる。まず、「同意要求」の場

合、話し手（S）と聞き手（H）ともほぼ同様の情報量を持つ。つまり【S＝H】という図式が成り立つ。一方、「確認」の場合、聞き手と比べると、話し手の持っている情報量が少ない。つまり【S＜H】という図式が成り立つ。図示すると、図 A と図 B のようになる。

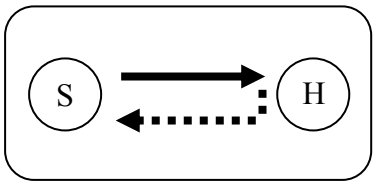


図 18：同意要求のダロウネ

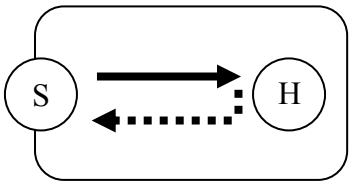


図 19：確認要求のダロウネ

S は話し手で、H は聞き手である。外側のサークルは情報を示す領域で、矢印は発話の進行、破線の矢印はその発話によって派生してくる作用（語用論的意味）を表す。「同意要求」では情報量が【S=H】になるため、図 A のように話し手と聞き手が情報サークルに置かれている。一方、「確認」では情報量が S＜H になっているため、図 B のように、話し手の一部は情報サークルから外れている。

図のように、ダロウネは、話し手が単に聞き手に向って発話するのみならず、そのあと聞き手のほうから情報を獲得しようとする働きもしている。この段階では、ダロウとネの役割がはっきり区別でき、それは、話し手が推量した結果をダロウの形式で聞き手に伝えて、加えてネを以って聞き手に情報を要求する、ということである。

3.5.1.2　疑問詞＋ダロウネ

次に、疑問詞とダロウネが共起する場合である。前節で考察した通り、これは修辞疑問である場合がある。すなわち、このような表現は聞き手に情報を要求するのではなく、単に疑問文の形式を以って聞き手に話し手自身の意見などを伝えるものである。図 C のように、破線の矢印はもともとダロウネの持っている「相手に情報を要求」する機能を示しているが、疑問詞の共起によってその機能を取り消し、一方伝達の表現になってしまうのである。

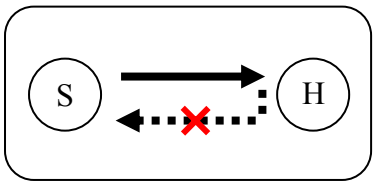


図 20：疑問詞＋ダロウネ

3.5.1.3　「詰問」のだろうね

そして、ダロウネの語用論的用法[20]－「詰問」を見てみよう。前節で掲げたように、「詰問」という機能は、推量を表すダロウと確認のネと共起して派生してくるもので、本来、話し手の推量したことを相手に伝えて確認するという働きをしている。しかし、状況によって話し手が聞き手に不信感を抱いて発話する際に、自分の推量した結果を相手に与えるが、相手の返答は、ダロウネ文の命題部分以外の選択を許さないという非妥協性[21]を有している。したがって、図Dのように、情報確認の部分（色の薄い逆矢印）が背景化され、破線の矢印で表す「詰問」がプロファイルされてくる。

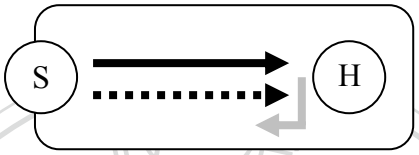


図 21：詰問のダロウネ

3.5.2　皮肉のダロウヨ

ダロウヨの場合、話し手が聞き手より多くの情報を持っていて、つまり情報量の関係は【S＞H】になっているので、図 E のように、情報範囲の中に話し手しかおらず、話し手は情報範囲外の所に置かれている。

また、ダロウヨとダロウネはいずれも聞き手目当ての働きをしているが、異なっているところは、言及する対象である。それは、推量のダロウが一方的情報供与のヨと共起する形式が、会話内容の中に出てくる人物にまでも投射される働きを持っている、ということである。すなわち、ダロウと結びついたヨは元来の一方的情報供与の働きを通して「皮肉」となり、しかもその対象は聞き手とは限らず、会話内容中の対象も射程内に入ってくるのである。この場合のダロウは推測の意味になる。

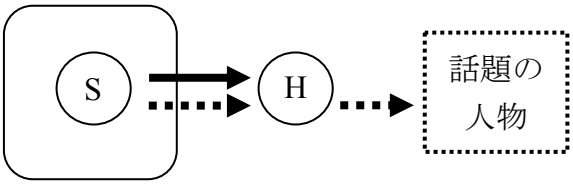


図 22：ダロウヨ

[20] 3.1.3 ダロウネの分析を参照。

[21] 例えば、「あのことは大丈夫だろうね？」と質問した場合、話し手は「あのことは大丈夫だ」という内容以外の返答を受け付けない。

3.5.3　非難のダロウガ

ダロウガの場合、ダロウネやダロウヨと異なって、情報範囲の決め手は終助詞ネかヨではなく、ダロウそのものである。 さらに、非難の発動条件は、確認要求を表すダロウと終助詞ガとの共起のため、話し手と聞き手が必ず同じ情報範囲内に置かれていなければならない。なぜならば、終助詞ガがなければ、ダロウの表わす機能は「確認要求」であり、「確認要求」は、話し手と聞き手が情報を共有しているものである。従って、話し手と聞き手が同じく情報サークルに置かれる。

ダロウガの語用論的解釈のプロセスはダロウネと似通っている。それは発話における確認の働き（色の薄い逆矢印）が、終助詞ガの共起によって背景化されて、非難の意味が入り込む（破線の矢印）、という点である。が、ダロウガは聞き手に直接非難をぶつけて相手に打撃を加えることを目的とするものであるため、ダロウネと比べて譴責の意味が強く感じられる。

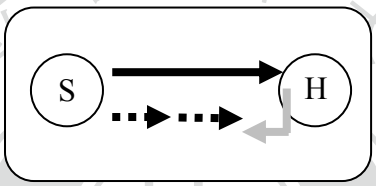


図 23：ダロウガ

なお、非難という意味の発生は、相手に突きつけたい事実と現実の結果が逆接の関係になっていることからくる。すなわち、終助詞ガとの共起がなければ、ダロウだけでは非難の意味にならない。それ故、ダロウガが表わす非難の意味は接続助詞としてのガが元々持つ逆接の用法から派生していると思われる。この点はダロウネとダロウヨと異なっている。また、ダロウヨのダロウが推測であるのに対し、ダロウガのダロウは確認要求に近い用法となっているのも差異の一つである。

3.5.4　意外・不満のダロウニ

ダロウニは、現実の事態と推測した結論が食い違って話し手が不満や意外などのマイナスの気持ちを表わすものである。その不満などの気持ちを感じられるのは、必ず現実の事態と推測の結論がよく分かっているはずである。よって、話し手と聞き手が同じ情報グループにいると考えられる。この場合のダロウは推測の意味になる。

そして、構造においては、普通ダロウニは聞き手に不満や意外などの気持ち（破線の矢印）を直接に表わすが、時には不満の気持ちは聞き手に対するのではなく、起こった事態に対して自分の文句や不満を表わす場合もある。つまり、愚痴をこぼす表現である。聞き手はその愚痴を受け取らされるのである。

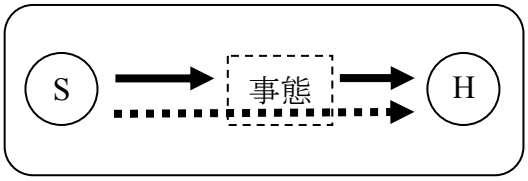


図 24　ダロウニ

3.5.5　まとめ

四者の比較をここでまとめてみよう。意味から見れば、ダロウネとダロウヨには、単なる文字通りの意味のみならず、情報流通のプロセスによって字句通りの意味から派生した語用論的な意味を持っている。それに対して、ダロウガの表わす非難などの意味は完全にダロウと終助詞ガが相加してできた意味である。そしてダロウニの不満や意外の気持ちは現実と発話者の推測と矛盾になることによって生じてくるのである。また、統語的機能から見れば、ダロウネのネとダロウヨのヨは終助詞としてしか使われないが、ダロウガとダロウニにおけるガとニは接続助詞としても使える。

そして、影響対象から見ると、いずれも聞き手目当ての働きを果たしているが、異なっているのはダロウヨとダロウニである。ダロウヨとダロウニの対象が聞き手だけでなく、会話内容における人物、あるい事態にまでも言及することができる、とのことは前節で分かった。

以上のことをまとめると、下の表になる。

表 20　ダロウネ、ダロウヨ、ダロウガ、ダロウニの比較

	ダロウネ	ダロウヨ	ダロウガ	ダロウニ
典型的用法	情報確認	情報伝達	推測・逆接	逆接
語用論的用法	詰問	皮肉	反論、非難	不満、愚痴
ダロウ	推量	推量	確認要求	推量
後接形式の品詞	終助詞		接続助詞、終助詞	
情報量	S ≦ H	S ＞ H	S ＝ H	S ＝ H
影響対象	聞き手	聞き手／ 話題中の人物	聞き手	聞き手／ 話題中の事態

第四章　ダロウと接続助詞ガ
―並列表現 A ダロウガ B ダロウガ

前節でダロウガについて考察してきたが、この場合のダロウガは確認要求を表わすダロウと逆接の接続助詞ガの組み合わせであった。しかし、ガには逆接のほかに、下のような表現も見られる。

(97) 相手が重役だろうが、社長だろうが、彼は遠慮せずに言いたいことを言う。（『日本語文型辞典』）

(98) 彼は、山田さんだろうが、加藤さんだろうが、反対する者は容赦しないと言っている。（『日本語文型辞典』）

これらの例は、ダロウガが、A ダロウガ B ダロウガという形式で現れており、並列的に物事を列挙するという働きをしていると考えられる。しかし、A ダロウガ B ダロウガのような並立用法は逆接の用法と相当異なっている。他の蓋然性を表わすモダリティと比較してみれば、やや特殊な用法といえよう。たとえば「A カモシレナイガ B カモシレナイガ」ということは言わない。このような並列の用法はダロウと接続助詞ガを結合して生み出したものと考えられる。そしてなぜ並列用法があるのかを解明するために、ダロウとガの意味を別々に考慮する必要があると思われる。

4.1　A ダロウガ B ダロウガにおけるガについて

接続助詞の機能は二つの文や句を連結し、前後の意味関係を表すものである。前節[22]で接続助詞ガについて考察してきたが、その代表的な接続の用法は対比や逆接[23]がある。AダロウガBダロウガの場合、ガはどんな働きを果たしているのだろうか。以下、例を見ながら考察してみよう。

(99) 有罪ときまればあとは全く法律が自動的に作用するから、さまざまの犯罪を重ねたものには「懲役二百五十六年」などという判決が出る。日本人の目から見れば、百年だろうが、百五十年だろうが、二百年だろうが、人間がそんなに生きているはずはないから、こんな数字は無

[22] 3.3.2 を参照。

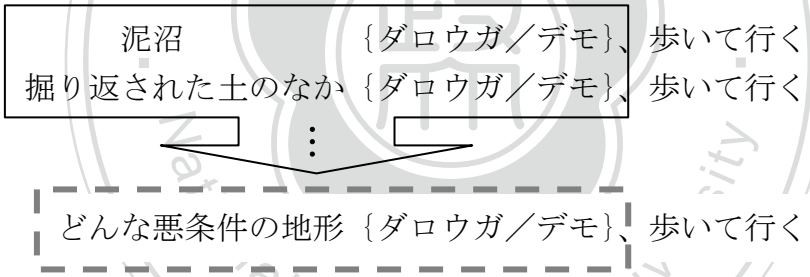
[23] 3.3.2 で考察した結果によると、接続助詞ガに対比、逆接、前置き、事情説明、問い返し、言いさし、非難、という七種の用法があることがわかった。しかし、接続助詞の働きをするのは対比、逆接、前置き、事情説明などである。ほかの用法は終助詞的な用法に近いか、あるいは終助詞的な用法と認められる。

意味であろう。（『日本人とユダヤ人』）

（100）ほんとうの狩人はズボンの裾が、踵の上に緒を引いている。しかし、かれらは、それをけっして折り上げたりはしない。そのままで、泥沼だろうが、掘り返された土のなかだろうが、歩いて行く。するとじきに、長靴が自然とできあがり、膝まですっぽり覆ってくれる。（『にんじん』）

上例と先に挙げた（97）、（98）はいずれも並列の表現である。ダロウガと接続するものは名詞に限られており、そして、並列的に挙げた名詞は互いに関連があるものと見られる。例（99）の場合は「百年単位の長い年月」に、例（100）は「悪条件の地形」にまとめられる。このようにダロウガは単に複数のものを連結する機能を果たしていると思われるが、これらの関連した名詞を個別に分けてみると、主節との関係がはっきり見られる。このダロウガはデモに置き換えることができる。（100）を例にして分解し、ダロウガをデモに代入してみると、下のようになる。

図 25　挙げた名詞における相互関係



上の表示のように、挙げられた名詞はある範囲・集合のメンバーの一つであるため、「疑問詞…ダロウガ／デモ」という形式で一括することができる。問題はなぜ並列表現が生み出されるのかについて森山（1995）では次のように述べている。

これが並列関係になるのは、前件でいかなる事態を想定しても、後件に変わりはないということを表わすことによるのであり、いわば臨時的な並列結合だと言える。（森山 1995：pp127）

森山は「臨時的な並列結合」とはどのようなものかについてはっきり説明していないが、これはやはり関連のある複数の物事が取り上げられるときに、その場で複数の条件節が「臨時的」に並列用法に転換する、ということではないだろうか。従って、上の提示によって、ダロウガのガは逆接ではなく、事柄を

並行的に取り上げる機能を果たしていると考えられる。同じ表現はまだ下のような例が挙げられる。

（101）質は悪いが値段も安い。
（102）親も大変だが子供も苦労する。（『明解国語辞典』）

前件と後件は対立でも逆接でもなく、単に関連した事柄を並べ挙げている。このように、ダロウガに並立の用法があることは、接続助詞ガの機能のため、生み出されるのであると認められよう。

4.2　A ダロウガ B ダロウガにおけるダロウについて

並列的に事柄を表わすのは、接続助詞ガの働きということが前節の考察から分かる。もう一つの問題は、なぜダロウと共起しなければならないかということである。まず例を見てみよう。

（103）私の方は何しろ十人きょうだいだから、雨だろうが雪だろうが、誰も迎えになぞ来やしない。彼女のところへはいつも若い叔母さん風の人が来て、余分な傘のある時にはそっと私にかしてくれたものだ
（『おんなの一人旅』）
（104）わたしがはしゃぎすぎて障子に穴をあけたとき、母が困った顔をしていた。もしも今ここにタイムマシンがあれば、昔にもどって、金箔をはったものだろうが、ラッセンに頼んで絵を描かせた特別注文のものだろうが、どんな障子紙でも与えることができる。しかし残念ながらまだタイムマシンは開発されておらず、机の引き出しを開けても未来の青い猫型ロボットはいないのである。（『失踪 HOLIDAY』）
（105）べつに私に興味があったわけではなく、他にこれといって見るべきものがないので私の顔を見たのだ。「デニーズ」の看板だろうが、交通標識だろうが、私の顔だろうが、べつになんだってよかったのだ。
（『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド 1』）

例から見れば、ダロウガと接続する名詞は必ず後に来る主節と関連するものと分かる。例えば、例（104）の場合、金箔でもラッセンの絵のものでも、いずれも障子紙の一種である。それ故、ダロウガと接続する名詞はある範囲あるいは集合におけるメンバーであると考えてよいだろう。そして、そのメンバーは複数あるので、並べ挙げるとき、断定よりむしろ非断定の推量形式でしたほうが無難だと思われる。従って、A ダロウガ B ダロウガにおけるダロウは推

量の働きをしていることが推測できよう。

4.3　A ダロウガ B ダロウガについて

4.3.1　A ダロウガ B ダロウガの意味・用法

A ダロウガ B ダロウガの意味について、グループ・ジャマシイ（1998）では次のように述べている。

「～だろうが～だろうが」の意味は「X でも、Y でも関係なく、だれでも（何でも）」と述べられている。

ただ説明が足りないのは、先行研究で挙げられた X と Y は、同じ範囲や集合の一種に限られているということである。それに、必ず後に来る主節と関連しなければならない。これは後の主節に現れる「疑問詞＋デモ」の形式からもみられる。

「疑問詞＋デモ」とは、例えば、前節で挙げた例（103）の場合は「どんな天気でも」、（104）は「どんな障子紙でも」、（105）は「なんだって」ということが背後に隠されている。「疑問詞＋でも」が表わす意味は、自由選択[24]で、すなわち、どんなものでもかまわず、範囲や集合内の一つであればいい、ということである。そして、関連する物事をいくら挙げても、後に来る主節事態はそれらに影響を与えられずに進行・成立することが表される。つまり、挙げられた事物を平等に評価づけることになる。

4.3.2　他の並列表現との比較

A ダロウガ B ダロウガと類似して並列を表す表現には「～（ヨ）ウガ～（ヨ）ウガ／～（ヨ）ウガ～マイガ」や「～（ヨ）ウト～（ヨ）ウト／～（ヨ）ウト～マイト」、「～テモ（デモ）～テモ（デモ）」などが挙げられる。「～（ヨ）ウガ～（ヨ）ウガ」と「～（ヨ）ウト～（ヨ）ウト」意味はほぼ同様で事柄の並列を表わしているが、A ダロウガ B ダロウガが名詞相当語にしか接続できないのに対して、その二者は動詞と形容詞という用言に接続しており、統語的な使い分けが相補分布している。また、「～（ヨ）ウト～（ヨ）ウト」のトはト

---

[24] 疑問詞と助詞の共起を観察してみると、主に四つのパターンに分けられる。

(1)　【疑問詞＋…か。】という形式で、「疑問」を表わす。例えば、「これは何ですか」。なお、この表現における助詞「か」は語尾に置かれるものである。

(2)　【疑問詞＋も】という形式で、「全称否定」を表わす。例えば、「どこへも行かない」。

(3)　【疑問詞＋～か～】という形式で「不定用法」を表わす。例えば、「どこへ行くか、分からない」。なお、その時の助詞「か」は文中に位置されるものである。

(4)　【疑問詞＋ても／でも】という形式で現れる。意味は、全ての条件が可能であるが、行動は同時に成立はしない、ということである。つまり、「自由選択」の意である。例えば「どこへでも行く」。

モの異形態で、ガと同じく逆接を表す接続助詞として使われている。以上の両形式はAダロウガBダロウガと形式や意味はほとんど一様であると言える。それに対して「～テモ（デモ）～テモ（デモ）」はAダロウガBダロウガと異同がある。

テモは逆接の仮定条件を表す形式である。「～テモ（デモ）～テモ（デモ）」に並列表現があることについて、以下のような指摘が挙げられる。

「ても」は「も」の働きにより、主節の事態を引き起こす条件が複数あることを示すので、逆条件節を複数並べることができる。

（日本語記述文法研究会 2008：pp148）

その意味はどんな条件でも同じ結果になるということである。この点はAダロウガBダロウガと一様である。相違点ではAダロウガBダロウガは名詞しか接続できないのに対して、「～テモ（デモ）～テモ（デモ）」は名詞のみならず、動詞や形容詞にも接続できる[25]。

また、「～デモ～デモ」の場合、挙げられた物事が一つだけでも成立するが、AダロウガBダロウガは、二つ以上の物事が必要である。これは例（97）や（98）のダロウガをデモに置き換えればはっきりわかる。

（97）相手が重役だろうが、〔社長だろうが／*φ〕、彼は遠慮せずに言いたいことを言う。

（97’）相手が重役でも〔社長でも／φ〕、彼は遠慮せずに言いたいことを言う。

（98）彼は、山田さんだろうが、〔加藤さんだろうが／*φ〕、反対する者は容赦しないと言っている。

（98’）彼は、山田さんでも〔加藤さんでも／φ〕、反対する者は容赦しないと言っている。

（97’）と（98’）のように、デモに接続する名詞は一つでも成立する。それは、デモはほかの関連する物事を暗示する働きを持っているからである。それに対して、ダロウガは複数のメンバーを挙げることによって集合全体を表す働きを持つ。

もう一つの相違は、AダロウガBダロウガは、特に会話の場合では、話し手が相手の考えなどに反駁する場面でよく用いられる。

[25] ただし、「AだろうがBだろうが」と比較するために、ここでは名詞に接続する「～でも～でも」を中心に考察する。

（106）「大体貴様が悪いんだぞ！怪電話があった時にすぐ何人か引き連れて駆けつけていれば、山崎一人ぐらい簡単に逮捕できた！」

「何言ってるんですか」

野々山も黙っていない。「彼女がせっかく知らせたのに一人で来るなんて！いや、一人で来るならともかく、彼女まで連れて来るなんて、どういうつもりです！」

「そ、それはあの女がどうしても来ると……」

「来るな、と止めるのが当り前じゃないですか！おかげで彼女は獣のような男のえじきに……。僕は一生警部を恨みます！」

「お、おい！そりゃ筋違いってもんだ！恨むなら山崎を――」

「筋違いだろうがギックリ腰だろうが、あんたを恨むんだ！ワラ人形を作って五寸釘を打ち込んで、呪い殺してやる！」

「貴様！よ、よくも日頃の恩を忘れて――」

「何が恩だい、笑わせるな、畜生！人をこき使って、自分は上役のご機嫌伺いしかしないくせに！」（『死者は空中を歩く』）

（107）真知子は由子の死の唯一の目撃者として、警察で事情聴取をされたのだが、そこへ恵子が怒鳴り込んで来たのである。

「一体どういうつもりなんです。家の娘をつかまえて！あの子は感じやすい、デリケートな性質なんですよ。友達が目の前で死んだだけでもショックなのに、こんな薄汚いバイ菌だらけのゴミ捨て場に何時間も閉じ込めとくなんて、無神経にもほどがあります！すぐ帰してもらいましょう！それに狭い部屋に男と二人で入れておくなんて、危険です！刑事だろうが警視総監だろうが男じゃありませんか。何です、その顔は。そんな蛙のオバケみたいな顔を見たら、娘はひきつけを起こすかもしれませんよ！さっさとあの子をここへ連れてらっしゃい！」

（『死者の学園祭』）

例（106）の場合、発話者の飯沢が野々山と山崎という人の逮捕について言い争うシーンである。（107）は、母親の恵子は娘の真知子に警察の審問について不満を表す。いずれも反駁のニュアンスが感じられる。なぜこんなニュアンスが生じてくるかというと、これは情報提示の量の食い違いから生じてくるからである。すなわち、もともと提示された人物（情報）は一つだけである。（106）では「筋違い」が、（107）では「刑事」が挙げられている。しかし、その情報を受けた発話者は、それ以上の情報、つまりギックリ腰や警視総監など相手が思いつかないような例も挙げて、どんなものでも結果が同じであると強調している。このように、相手の予想範囲外の情報を提示する、あるいは相手の認識不足を突くことによって、反駁あるいはやや攻撃的なニュアンスが生み出される。それに対して「～デモ～デモ」は単に相手の予想範囲内の仮定条件を述べ

るだけである。

先に挙げたのは会話の場面であるが、その時の A ダロウガ B ダロウガには反駁や押し付けのような評価付けが感じられる。しかし、全ての表現にあるわけではない。下のように、中立的に物事を挙げる表現もある。

（108）「おじさん、作家なの？」
伊波は、ちょっと面食らったが、
「ああ、そこの本を見たんだね？」と笑った。
彼の旧作で、カヴァーに写真が出ているのである。
「大分若い写真だろう」
「そうね。でも、今でもそう老けていないよ」
「そいつはどうも」
「いいなあ、作家って。好きなことして暮せるんでしょ」
「そう単純じゃないよ」と、伊波は苦笑した。
「どうしてこんな所に住んでいるの？」
「さあ。――何となく、こういう静かな所が好きなんだよ」
「やっぱり、こういう場所の方が、よく書けるの？」
「いや、そんなことはない」
と、伊波は首を振った。「場所じゃないよ、問題は」
「それじゃ、なあに？」
「精神状態だな。色々あって気持が乱れていると、どんなに静かな所でも書けない。逆に、書きたいことが溢れ出て来るときには、やかましい喫茶店の中だろうが、列車の中だろうが、書けるよ」
（『失われた少女』）

（108）の場合は、伊波がまず相手の質問に答えて、さらに情報を補充するように、静かでない環境の例を言い出している。前の例と比べてみれば、同じように他の情報を提示しているが、前のことと後に加えた情報はいずれも発話者自身が出したものであるので、反駁や攻撃的な意味というより、むしろ情報の補足と考えればよいだろう。この時のダロウガは、デモに置き換えても意味上はあまり変わりはない。

（108’） やかましい喫茶店の中でも、列車の中でも、書けるよ

それゆえ、並列の表現に発話者の感情が含まれるのは、A ダロウガ B ダロウガに限り、同じく並列を表わす「A テモ B テモ」にはない。ここからも両者の差異を伺うことができる。それゆえ、「～ヨウガ～ヨウガ」「～ヨウト～ヨウト」「～ヨウガ～マイガ」「～ヨウト～マイト」も同様に反駁のニュアンスを

持つことがあり、逆に「～テモ～テモ（～デモ～デモ）」はそのニュアンスを持たない中立譲歩になる、と言うことができよう。

以上の並列表現の異同をまとめると、下表のようになる。

表 21　A ダロウガ B ダロウガと他の並列表現との比較

<table>
<tr><th>並列表現</th><th>挙げる条件の数量</th><th>接続</th><th>意味</th><th>語用論的意味</th></tr>
<tr><td>A ダロウガ
B ダロウガ</td><td>二つ以上</td><td rowspan="2">名詞[26]</td><td rowspan="7">ある集合のどのメンバーを挙げても、主節が影響に受けられずに同じ結果になる</td><td>反駁</td></tr>
<tr><td>～デモ～デモ</td><td>一つ以上</td><td rowspan="2">中立譲歩</td></tr>
<tr><td>～テモ～テモ
（～デモ～デモ）</td><td>一つ以上</td><td rowspan="3">動詞
形容詞</td></tr>
<tr><td>～ヨウガ～ヨウガ</td><td rowspan="2">一つ以上</td><td rowspan="2">反駁</td></tr>
<tr><td>～ヨウト～ヨウト</td></tr>
<tr><td>～ヨウガ～マイガ</td><td rowspan="2">二つ</td><td rowspan="2">同じ動詞・形容詞の肯定－否定というペア形式</td><td rowspan="2">反駁</td></tr>
<tr><td>～ヨウト～マイト</td></tr>
</table>

[26] 子音動詞の語幹末尾が〔m〕〔n〕〔b〕〔g〕の場合も「でも」に接続するが、本節では「だろうが」と比較するものであるので、本表では名詞接続の「でも」と動詞接続の「でも」を区別して記す。

第五章　結論

多くの先行研究のでは、ダロウの意味用法は推測と確認要求であると指摘している。しかし、蓋然性モダリティのダロウは特に終助詞と組み合わされる時に出てくる意味は単なる「推測」「確認要求」とは趣を異にする。本論は、このような組み合わせ（ダロウ＋終助詞／接続助詞）によって新しい意味の生起のメカニズムを考察し、さらにダロウの本質を把握することを試みた。

5.1　ダロウネ

終助詞ネは基本的に「同意要求」と「確認」という二つの用法に分けられる。情報の所有量から見ると、聞き手と比べて、話し手が持っている情報量は多い、あるいは等しい、という二つの状況になる。その情報構造は【S＝H】と【S＞H】で表示されることができる。また、発話者の態度によって、ネはさらに「和らげ」と「詰問」という二種類に区別できる。和らげと詰問という用法は発話者の感情や心理状態によって、それぞれ同意要求と確認から派生されてきたものであり、文脈や発話の状況によって別の意味が生起するのである。

また、ダロウネの基本的用法は情報の確認である。ネには「同意要求」と「確認」の用法があるが、ダロウネも同様である。だが、ネと異なって、ダロウネは話し手の情報が不確かであるため、ダロウを用いて推量を表す。

ダロウネが疑問詞疑問文に現れる場合は、「修辞疑問」の表現になり、情報の確認でなく、話し手が聞き手の反応を見る、という使い方になることがある。

ダロウネは「詰問」の意味を表すこともある。形式は同じく【推量のダロウ＋確認のネ】」という組み合わせであるが、情報を確認するというより、相手に対する不信感を言外に推測させることになる。それ故、この「詰問」の表現は、ダロウネに限られ、単にネだけでは「詰問」になり得ない。

5.2　ダロウヨ

終助詞ヨの基本的機能は「聞き手の知らない情報を伝える」ということであり、その情報構造は【S＜H】と示すことができる。ヨの用法を分類すれば、①注意を促す、②説明を行う、③相手からの依頼（など）を受け入れる返答、④聞き手に対する非難や皮肉、⑤聞き手に対する感情の強調、という五つがある。用法①と②は、話し手が持っている情報量の優位を表すものでおり、情報の量的側面に分類される。一方、④と⑤は、聞き手に情報の再認識を促すことから生じてくる用法であり、重点は情報の伝達より、むしろ相手の認識不足に対する非難などの働きをしているゆえ、情報の質的側面に属している。そして③の用法は、情報量の優位のみならず、話し手の発話態度も含まれている

ので、情報の量的側面と質的側面を併せ持っている。

上の考察を踏まえてダロウヨを全体から見ると、やはり情報の伝達が基本的であり、ヨは話し手の情報優位を示し、ダロウは発話内容の真偽を推量する、あるいは情報についての断定を避ける婉曲な表現である。特にダロウヨにおけるダロウは推量の機能を果たす時、副詞「きっと」と共起可能である。

以上の表現はいずれも聞き手より話し手のほうが情報を多く持っていることからきているが、そのほかに、聞き手が持っている情報が話し手と同じ場合では、ダロウヨは話し手が聞き手の既知の情報について解釈を与えるという機能が発揚され、「皮肉」の態度を表すことになる。この表現は「自嘲・他嘲」を表す陳述副詞「どうせ」と共起しやすいことが確認された。

5.3　ダロウガ

助詞ガは主に格助詞や接続助詞としての機能が注目されやすいが、ダロウと組み合わさると終助詞的な機能も帯びてくる。3.3.2 では、接続助詞ガの用法を検討し、どのよう終助詞的な用法が生み出されるのかを考察した。その結果、接続助詞ガの基本的な用法が「対比」と「逆接」であることがわかった。接続助詞ガにおける前件と後件の内容は後件のほうが重視されている。接続助詞ガの基本的用法の「対比」と「逆接」は、両者とも「後件情報重視」の情報構造になっていると思われる。

「対比」と「逆接」のほか、ガには、「前置き」、「事情説明」、「問い返し」、「言いさし」などの表現がある。「前置き」と「事情説明」は後件の内容を提示するために用いられる表現であるが、その発話動機から見ると、やはり後件の情報が注目されている。「問い返し」の表現では、後件の省略の代わりに、聞き手にその内容を予想させる意図がある。「言いさし」表現に至っては、後件の存在がなくなり、ガ（／ケド）に「相手の反応を見る」という機能が課されている。さらに、後件の存在がなくなるに伴い、品詞も接続助詞から終助詞へと移り変わっていく。また、伝えるはずの後件内容が言語化されないことによって、相手への言外の指摘も強める効果があるので、「非難」の表現になるわけである。

以上の考察から、ダロウガは「相手を非難する」ニュアンスを持つことがわかった。ダロウガにおけるダロウは「確認要求」の機能を果たしており、ガが非難の機能を持つのは、ダロウの確認要求の機能と結びついているからである。

5.4　ダロウニ

ダロウニには、接続助詞と終助詞の用法があるが、本稿では終助詞的な用法に注目した。ニは古語の接続助詞であるが、現代語ではニの代わりにノニとし

て用いられている。

ノニ（／ニ）には「逆接（慣例予測の逆接と行動予測の逆接）」と「因果関係のある対比」という文中での用法と、話し手が推論の未実現に対して遺憾や不満の気持ちを表わすという文末での用法があることが確認された。

ダロウニは前件と後件の矛盾に対する発話者の不満や意外などのマイナスの気持ちを表す。特にダロウニの終助詞的な用法では、後件が希薄になり、言語化されないため、事態に対する発話者の不満・愚痴といった心理態度がはっきり感じられる。

5.5　並列表現 A ダロウガ B ダロウガ

3.3 ではダロウガについて考察したが、それは「非難」を表す表現であった。それが A ダロウガ B ダロウガ、という形式で文中に現われると、関連した事柄を並べ挙げる働きも持つガの機能のおかげで、並列的に物事を挙げるという働きをすることがわかった。そして、ダロウガに前接する名詞はある範囲あるいは集合におけるメンバーであるため、複数の選択肢を選び出すとき、非断定の推量形式ダロウのほうが無難であるため、ダロウガという形式で用いられるのである。

A ダロウガ B ダロウガは並列的に物事を挙げるものであるが、関連する物事をいくら挙げても、後に来る主節事態はそれらに影響を与えられずに進行・成立する。

A ダロウガ B ダロウガと「～デモ～デモ」は意味が同様であるが、①挙げる物事の数量では、「～デモ～デモ」は一つだけでも成立する、A ダロウガ B ダロウガは必ず二つ以上挙げなければ成立しない、②会話の場合では、「～デモ～デモ」は相手の提示した情報を受け入れて、またそのまま述べるのに対し、A ダロウガ B ダロウガは原本の情報のほかに、相手の予想範囲外の情報も提示する、③A ダロウガ B ダロウガは聞き手の持つ以上の情報を提示するため、相手に反駁し、相手の認識不足を突くというやや攻撃的なニュアンスが含まれている、という相違点があることが解明された。

5.6　ダロウと各後続形式

以上の考察によって、ダロウと各後続形式の関係は下表のようにまとめられる。

表 22　ダロウと各後続形式の関係

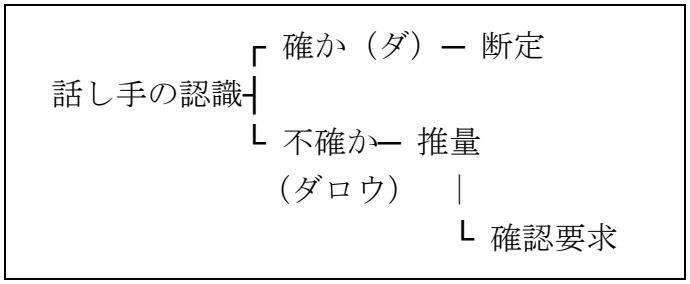
	典型的 意味	語用論的 意味	ダロウの 用法	情報量	影響対象
ダロウネ	情報確認	詰問	推量	S≦H	聞き手
ダロウヨ	情報伝達	皮肉	推量	S＞H	聞き手／ 話題中の人物
ダロウガ	推測・逆接	反論、非難	確認要求	S＝H	聞き手
ダロウニ	逆接	不満、愚痴	推量	S＝H	聞き手／ 話題中の事態
A ダロウガ B ダロウガ	並列	反駁	推量	S＞H	聞き手

5.7　ダロウの用法の本質

この研究は、ダロウと各後続形式の組み合わせによって生起した意味・用法を分析し、さらにダロウの本質を把握することが目的であった。本稿の考察によっては、ダロウが終助詞や接続助詞と組み合わさるとき、ダロウは推量の機能を担っているが、終助詞や接続助詞は対人機能、あるいは接続の機能を果たしていることがわかった。意味では、ダロウと各終助詞や接続助詞のそれぞれの意味が加算されるだけでなく、その両形式の組み合わせによって語用論的意味が発生することを証明した。もしダロウを断定形式に置き換えると、単純な情報伝達になってしまう。このように、ネの詰問の表現や、ヨの皮肉の表現など、いずれも推量のダロウ不可欠な要素ことが確認された。

以上のように、ダロウと各後続形式の組み合わせを考察することによって、ダロウの本質は推量であることがわかった。そして、情報の処置の仕方によって、確認要求の用法もある。つまり、推量、単に話し手の推測した考えや意見を聞き手に伝えるに対して、確認要求は、話し手の推測した考えや意見を聞き手に伝えると同時に、聞き手の反応や答えを期待する、ということである。以上のことを図示すれば、下のようになる。

図 26　ダロウについて



5.8　今後の課題

本稿ではダロウと終助詞や接続助詞との共起について考察し、さらにダロウの意味を検討してきたが、なおいくつかの問題については今回は触れなかった。

第一に、イントネーションの問題である。ダロウの用法は主に推量と確認要求に分けられる。これらの用法は、機能や意味が相違しているほかに、イントネーションも異なっている。例えば、「明日、雨が降るだろう（↘）」「明日のパーティー、君も来るだろう（↗）」。それ故、イントネーションはどんな機能を担っているのかを分析し、さらにダロウとの共起を考察する必要がある。

第二に、推量の表現としては、ダロウの他に、他にカモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダなどがある。しかし、「*彼は来るかもしれないし、来ないかもしれない」は言えるが、「彼は来るだろうし、来ないだろう。」は非文になってしまう。これらの推量形式はどんな異同が存在しているかはまだ詳しく検討していない。

以上のことを今後の課題としてより深く考察してみたい。

國立政治大學
National Chengchi University

参考文献

単行本・論文

安達太郎（1997）「「だろう」の伝達的な側面」『日本語教育 95 号』pp.85-96 日本語教育学会

石神照雄（1993）「推量の認識と構文」『国語学 174 集』国語学会

伊豆原英子（1993）「「ね」と「よ」再考—「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育 80 号』日本語教育学会

庵功雄・松岡弘・中西久実子・山田敏弘・高梨信乃（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

庵功雄・松岡弘・中西久実子・山田敏弘・高梨信乃（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

石黒圭（1999）「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学 198 集』国語学会

岩澤治美（1985）「逆説の接続詞の用法」『日本語教育 56 号』日本語教育学会

内田安伊子（2001）「「けど」で終わる文についての一考察－談話機能の視点から－」『日本語教育』109 号　日本語教育学会

小野正樹（2005）『日本語態度動詞文の情報構造』ひつじ書房

神尾昭雄（1990）『情報の縄張り理論—言語の機能的分析』大修館

菊地康人（2000）「ようだ」と「らしい」－「そうだ」「だろう」との比較も含めて－　『国語学第 51 巻 1 号』

グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例』秀英出版

小泉保（1990）『言外の言語学－日本語語用論－』三省堂

小泉保（2001）『入門語用論研究－理論と応用－』研究社

小矢野哲夫（1995）「格くずれ—ひとえ文とあわせ文のあいだ—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお

佐治圭三（1997）「終助詞の機能」『日本語の文法の研究』ひつじ書房

白川博之（1995）「理由を表わさない「カラ」」仁田義雄編『複文の研究（上）』くろしお

白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお

杉浦滋子（2006）「日本語諸方言に見る終助詞ガの形式上・機能上の差異」麗澤大学院言語教育研究科論集『言語と文明』第 4 巻

杉村泰（2007）『日語語法問題解疑』（邦題：日本語学習者のための日本語教育文法）外語教学与研究出版社（北京）

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅱ巻』くろしお出版
鄭相哲（1995）「ネとダロウとジャナイカ－確認要求形式－」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお
鄭相哲（2004）『日本語認識モダリティの機能的研究：ダロウを中心に』J&C出版
冨樫純一（2005）「複合助詞「にしろ」「にせよ」「であれ」—その意味と諸用法をめぐって—」『筑波日本語研究 10』筑波大学人文社会科学研究科
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4　第 8 部　モダリティ』くろしお
日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法 6　第 11 部　複文』くろしお
蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為－「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法－」」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお
藤城浩子（1997）「「判断のモダリティ」についての一考察」『日本語教育 92 号』p.153-164　日本語教育学会
深尾まどか（2005）『終助詞の意味と機能』東呉大学日本語文学系博士論文
ヘイズ高野園・新里瑠美子（2001）「条件の接続助詞から談話・対人機能の助詞へ－タラ、ッタラの文法化－」南雅彦・アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育Ⅱ』くろしお
本多　啓（2001）「文構築の相互行為性と文法化－接続表現から終助詞への転化をめぐって－」
前田直子（1995）「ケレドモ・ガとノニとテモ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお
三宅知宏（1993）「派生的意味について－日本語質問文の一側面－」『日本語教育』79 号日本語教育学会
三原健一（1995）「概言のムード表現と連体修飾節」仁田義雄編『複文の研究
宮崎和人（1993）「「ダロウ」の談話機能について」『国語学 175 集』国語学会
宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（2002）『新日本語文法選書 4　モダリティ』くろしお出版
宮崎和人（2004）「確認要求形式の類型と互換性」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要第 18 号』岡山大学大学院文化科学研究科
宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現－疑いと確認要求－』ひつじ書房

森山卓郎（1989）「認識のムードとのその周辺」仁田・益岡編『日本語のモダリティ』くろしお
森山卓郎（1989）「内容判断の一貫性の原則」仁田・益岡編『日本語のモダリティ』くろしお
森山卓郎（1989）「コミュニケーションにおける聞き手情報」仁田・益岡編『日本語のモダリティ』くろしお
森山卓郎（1995）「並列述語構文考—「たり」「とか」「か」「なり」の意味用法をめぐって—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお
森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（2000）『日本語の文法３　モダリティ』岩波書店
山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館
山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお
山村仁朗（2007)「浮世風呂・浮世床における「に」と「のに」—逆接の接続助詞—」『中日理論言語学研究会第 8 回研究会発表論文集』中日理論言語学研究会
渡部学（1995）「ケド類とノニ—逆接の接続助詞—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお
Grice,H.P.（1989）Studies in the Way fo Words.　Cambridge, MA.: Harvard University Press.
Jenny Thomas, 1995　Meaning in Interaction: an Introduction to Pragmatics（浅羽良一監修　田中典子等訳（1998）『語用論入門－話し手と聞き手の相互交渉が生む出す意味』研究社）

辞書・辞典

『日本語文型辞典』くろしお
『明鏡国語辞典』CD-ROM　大修館書店
ロイヤル英文法改訂新版 CD-ROM

引用小説・ウェブサイト

赤川次郎（1997）『失われた少女』角川書店
赤川次郎（1981）『さびしがり屋の死体』角川書店
赤川次郎（1981）『孤独な週末』角川書店
赤川次郎（1992）『天使は神にあらず』角川書店
赤川次郎（1993）『一日だけの殺し屋』青樹社
赤川次郎（1997）『失われた少女』角川書店

國立政治大學 National Chengchi University

赤川次郎（1997）『やさしい季節 上』角川書店
赤川次郎（1999）『死者は空中を歩く』角川文庫
赤川次郎（2000）『死者の学園祭』角川文庫
赤川次郎（2000）『おとなりも名探偵』角川書店
赤川次郎（2001）『くちづけ 下』角川書店
浅野良治（2001）『蜩』文芸社
阿部幸三（2002）『トリック上の殺人者』文芸社
イザヤ・ベンダサン（1971）『日本人とユダヤ人』角川書店
英語出版編集部（2008）『究極の英語リスニング』アルク
乙一（2000）『失踪 HOLIDAY』角川書店
荻生正春（2002）『世界を翔ける男』文芸社
上坂冬子（1983）『おんなの一人旅』文芸春秋
かんべむさし（1986）『かんちがい閉口坊』文藝春秋
清め野塩（2004）『雪の積む里』文芸社
倉橋由美子（1989）『アマゾン国往還記』新潮社
グスタフ・フォス（1977）『日本の父へ』新潮社
語書光徳（2000）『職は人生の天王山』文芸社
シュトルム著　関泰祐訳（1979）『みずうみ』岩波書店
ジュール・ルナール著　岸田国士訳（1976）『にんじん』岩波書店
宝納八茶（2002）『漫才師の卵のタマゴ』文芸社
高樹あんず（2004）『声をください』文芸社
ディケンズ著村岡花子訳（2001）『炉ばたのこおろぎ』新潮社
乃南アサ（2003）『あなた』新潮社
三浦綾子（1973）『塩狩峠　道ありき』新潮社
三浦綾子（1982）『氷点』角川書店
光瀬龍（1987）『紐育、宜候』角川書店
村上春樹（1988）『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド 1』新潮社
朝日新聞　http://www.asahi.com/
http://www.namako.to/tokelau/tiger2.html
http://marron.nyaos.net/archives/2006/03_index.php?page=2

國立政治大學 National Chengchi University